南国市埋蔵文化財発掘調査報告書　第 26 集

西野々遺跡

－香長中学校校舎等建築に伴う発掘調査報告書１－

２０１４．３

高知県南国市教育委員会

序

南国市は物部川と国分川に育まれた肥沃な香長平野に抱かれ、「土佐のまほろば」といわれるように古くから人が生活を営むのに大変適した場所で、数多くの遺跡が所在します。代表的なものとして、旧石器時代の奥谷南遺跡に始まり、弥生時代の田村遺跡群、紀貫之の土佐日記にも記される土佐国衙跡、中世守護代細川氏の居館である田村城跡、長宗我部氏の居城である岡豊城跡などがあります。

そのなかで、西野々遺跡は弥生時代から近世に至る複合遺跡であり、特に弥生時代の集落跡、古代の官衙関連遺構、そして中世の屋敷跡に代表される成果がこれまでに確認されています。県内最大級の弥生時代集落である田村遺跡群の衛星集落としての関連性も指摘されており、高知県の歴史を語るうえでも重要な意味をもっています。

本書は平成21年度に行われた香長中学校校舎建て替えに伴う西野々遺跡発掘調査の成果をまとめたものです。特に、弥生時代の集落の盛衰や古代・中世の遺跡の広がりが確認できたことは大きな成果です。今後広く利用され、文化財保護及び学術研究の一助になれば幸いです。

調査にあたりご指導を賜りました高知県教育委員会、(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター、また、発掘調査への深いご理解とご協力をいただいた周辺地区の方々、そして発掘・整理作業にご尽力いただいた作業員の皆様に心より厚くお礼申し上げます。

平成26年3月

南国市教育委員会
教育長　大野　吉彦

例　言

1．本書は、平成21年度に南国市教育委員会が実施した香長中学校校舎改築に伴う西野々遺跡発掘調査の報告書である。

2．西野々遺跡は、高知県南国市大埇乙西野々に所在する。

3．調査期間は以下のとおりである。

試掘確認調査：平成21年3月16日～27日、5月11日～15日

発掘調査：平成22年1月12日～3月12日

4．発掘調査は、南国市教育委員会が主体となり、高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターの協力を得て実施した。平成21年度の調査体制は以下のとおりである。

調査員　　坂本裕一（南国市教育委員会　生涯学習課　文化スポーツ係　指導主事）

5．本書の執筆・編集は当初坂本が行い、油利が引き継いで行った。

6．調査トレンチ、調査区番号については適宜設定した。 遺構については、竪穴建物跡(ST)、掘立柱建物跡(SB)、土坑(SK)、溝状遺構(SD)、柱穴(P)で表示した。

本書の標高は海抜高であり、方位は座標北を用いた。

7．現場作業においては、高知県教育委員会文化財課、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター諸氏のご指導・ご教授を得た。整理作業においては、(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター諸氏のご指導を得た。記して深く謝意を表したい。

8．発掘調査にあたっては、地元住民の方々のご理解・ご協力を得た。また、以下の現場作業員、整理作業員の皆様のご協力を得た。記して深く謝意を表したい。

（敬称略、50音順）

〔現場作業員〕大石幸雄、久家瑞、窪田泰詔、黒岩幸子、澤本昌明、武内昌子、西川初男、橋田芳雄、橋本佐与子、比山隆雄、宮添彬、吉本美代子

〔重機オペレーター〕大杉英樹、森岡和彦

〔整理作業員〕井澤久未、大谷亜紀子、門田美知子、高橋由香、竹村延子、藤方正治、山中章平、山中美代子

9．当遺跡の出土遺物は南国市教育委員会が保管している。遺跡の略号は09－NNである。

本　文　目　次

第Ⅰ章　調査に至る経過と調査の方法

１．調査に至る経過 …… 1

２．遺跡の概要 …… 1

３．調査の方法 …… 2

４．試掘確認調査 …… 2

第Ⅱ章　周辺の地理的・歴史的環境

１．地理的環境 …… 5

２．歴史的環境 …… 5

第Ⅲ章　調査の成果

１．調査の概要と基本層序 …… 10

２．検出遺構と出土遺物

（１）竪穴建物跡 …… 13

（２）土坑 …… 21

（３）溝状遺構 …… 29

（４）掘立柱建物跡 …… 37

（５）その他の遺構・遺物 …… 41

第Ⅳ章　総括

１．弥生時代 …… 48

２．古代・中世 …… 50

３．まとめ …… 50

挿 図 目 次

図 1　南国市位置図 …… 1
図 2　調査区配置図 …… 2
図 3　試掘トレンチ位置概略図 …… 3
図 4　試掘トレンチ土層柱状図及び出土遺物実測図 …… 4
図 5　西野々遺跡周辺の遺跡 …… 7
図 6　調査区土層図 …… 10
図 7　遺構全体図 …… 11
図 8　ST1 遺構図及び出土遺物実測図 …… 13
図 9　ST2・3・6 遺構図及び ST2・3 出土遺物実測図 …… 14
図 10　ST4 遺構図及び出土遺物実測図 …… 16
図 11　ST4 出土遺物実測図 …… 17
図 12　ST5・7 遺構図及び ST5 出土遺物実測図 …… 18
図 13　SK2 ～ 6 遺構図 …… 20
図 14　SK9 ～ 14 遺構図 …… 22
図 15　SK15・17 ～ 21・24・26 遺構図 …… 24
図 16　SK22・23・25・28 ～ 30・32 ～ 34 遺構図 …… 26
図 17　SK10・11・14・18・19・21・30・34 出土遺物実測図 …… 28
図 18　SK22 出土遺物実測図 …… 30
図 19　SD1 ～ 3 遺構図及び SD2 出土遺物実測図 …… 31
図 20　SD4 ～ 8 遺構図 …… 32
図 21　SD9 ～ 11 遺構図 …… 34
図 22　SD9・10 出土遺物実測図 …… 35
図 23　SD10 出土遺物実測図 …… 36
図 24　SD12 ～ 14 遺構図 …… 38
図 25　SB1 遺構図 …… 39
図 26　SB2 遺構図 …… 40
図 27　SB3 遺構図 …… 41
図 28　ピット列遺構図 …… 42
図 29　ピット・包含層出土遺物実測図 …… 43
図 30　時期別遺構配置図 …… 49

表 目 次

表 1　出土土器・土製品観察表 …… 44
表 2　出土石器観察表 …… 47

写真図版目次

図版１　調査前全景（南東から）
調査前全景（西から）
図版２　１区・２区遺構検出状況（南東から）
１区西遺構検出状況（北から）
図版３　１区東遺構検出状況（北から）
２区遺構検出状況（北西から）
図版４　１区遺構完掘状況（北東から）
２区遺構完掘状況（北西から）
図版５　２区遺構完掘状況（南から）
２区遺構完掘状況（南西から）
３区遺構完掘状況（北から）
３区土層堆積状況（東から）
ST1 完掘状況（南から）
図版６　ST1 石器出土状況（北から）
ST2 遺構検出状況（南から）
ST2 床面検出状況（南から）
ST2・3・6 検出状況（南から）
ST2 完掘状況（北から）
図版７　ST3 完掘状況（東から）
ST3 土層堆積状況（西から）
ST3 東サブトレンチ（北から）
ST3 床面検出状況（南から）
ST2・3・6 完掘状況（北から）
図版８　ST4 完掘状況（南から）
ST4 土層堆積状況（東から）
ST4 中央ピット土層堆積状況（西から）
ST4 床面検出状況（東から）
ST4 中央部土器出土状況（北から）
図版９　ST4 P4 上土器出土状況（北から）
ST4 P4 上土器出土状況（北から）
ST5・7 土層堆積状況（西から）
ST5・7 土層堆積状況（南から）
ST5・7 完掘状況（南から）
図版 10　SK2 土層堆積状況（南から）
SK2 完掘状況（南から）
SK3 土層堆積状況（東から）
SK3 完掘状況（南西から）
SK4 完掘状況（北から）
SK5 土層堆積状況（東から）
SK9 土層堆積状況（南から）
SK10 土層堆積状況（北から）
図版 11　SK10 土器出土状況（北から）
SK9・10 完掘状況（東から）
SK11 土層堆積状況（南から）
SK11 完掘状況（西から）
SK12 土層堆積状況（東から）
SK12 完掘状況（北から）
SK13 土層堆積状況（東から）
SK13 完掘状況（北から）
図版 12　SK14 完掘状況（北から）
SK15 完掘状況（北から）
SK17 土層堆積状況（南から）
SK17 完掘状況（南から）
SK18・SD13 土層堆積状況（北から）
SK18 完掘状況（北から）
SK19 土層堆積状況（東から）
SK19 完掘状況（北から）
図版 13　SK20 土層堆積状況（東から）
SK21 土層堆積状況（北から）
SK21 完掘状況（北から）
SK22・25 土層堆積状況（南から）
SK22 土器出土状況（西から）
SK22 完掘状況（南から）
SK26 土層堆積状況（南から）
SK26 完掘状況（北から）

図版 14　SK28 土層堆積状況（東から）
SK28 完掘状況（南から）
SK33 土層堆積状況（東から）
SK34 土器出土状況（西から）
SD1 土層堆積状況（南から）
1 区南壁 SD1 土層堆積状況（北から）
1 区南壁 SD2 土層堆積状況（北から）
1 区南壁 SD3 土層堆積状況（北から）
図版 15　SD9・10 土層堆積状況（南から）
SD10 土層堆積状況（南から）
SD9・10 遺物出土状況（南から）
SD9 石包丁出土状況（東から）
SD9・10 完掘状況（南から）
図版 16　SD1 ～ 3 完掘状況（南から）
SD12 ～ 14 完掘状況（南から）
図版 17　SB1 ～ 3 完掘状況（北から）
ピット列完掘状況（南から）
P8 土器出土状況（南から）
P22 土器出土状況
P89 石器出土状況（南から）
P95 土器出土状況（南から）
P123 土器出土状況（東から）
1 区西下層確認状況（東から）
図版 18　出土遺物 1
図版 19　出土遺物 2
図版 20　出土遺物 3
図版 21　出土遺物 4
図版 22　出土遺物 5
図版 23　出土遺物 6
図版 24　出土遺物 7
図版 25　出土遺物 8
図版 26　出土遺物 9
図版 27　出土遺物 10
図版 28　出土遺物 11
図版 29　出土遺物 12
図版 30　出土遺物 13
図版 31　出土遺物 14

第Ⅰ章　調査に至る経過と調査の方法

１．調査に至る経過

南国市立香長中学校校舎等の老朽化に伴い、北校舎及びプールの改築とともに武道館の新設工事が計画された。香長中学校は高知南国道路の建設に伴う発掘調査で多くの遺構と遺物が確認された西野々遺跡の南側に隣接し、西野々遺跡の広がりが十分考えられる。そこで、工事計画地の遺構・遺物の有無を確認し、遺跡の保護と開発事業との調整を図ることを目的として試掘確認調査を実施することとなった。

調査の結果、弥生土器の包含層及び溝状遺構やピットなどの遺構が検出されたため、西野々遺跡の範囲を拡大するとともに、事業担当課と協議を行い、平成 21 年度に校舎改築場所、平成 23 年度に武道館建築場所の本調査を実施することとなった。本報告では、試掘確認調査及び平成 21 年度調査について報告する。

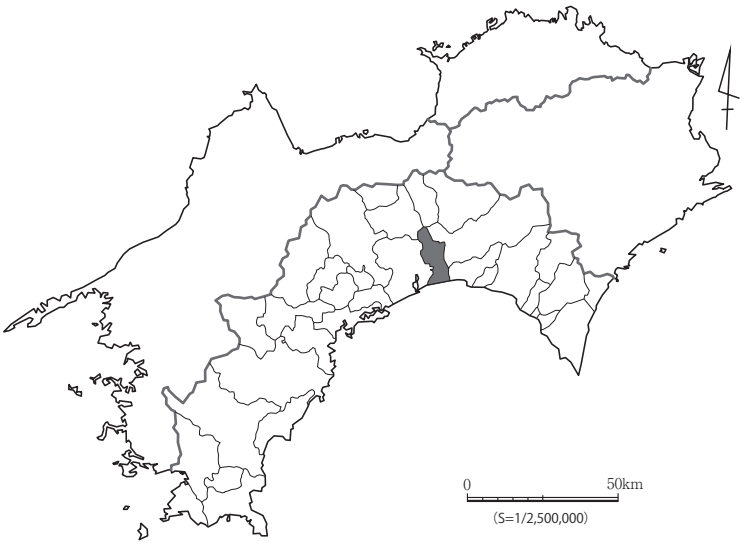


図1　南国市位置図

２．遺跡の概要

西野々遺跡は弥生時代～近世にかけての複合遺跡であり、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターにより平成 16 ～ 17 年度に高知南国道路建設に伴う発掘調査が実施され、多くの遺構と遺物が確認された。

遺跡中央部分では弥生～中世の各時代の水路が複数重複して検出されている。遺跡範囲の東端部では、弥生時代の遺構は中期後半～後期初めの竪穴建物跡や掘立柱建物跡、舟形土坑などが検出された。古代の遺構は、溝跡や竪穴状遺構とともに大曾郷の郷家と考えられる方形柱穴の掘立柱建物群が検出され、遺物では緑釉陶器や二彩土器なども出土している。中世の遺構は、14 ～ 15 世紀頃と考えられる溝や塀で区画された屋敷跡や畑の畝状遺構も検出された。また、四国では初めてとなる 14 世紀頃の方形区画墓が検出されている。

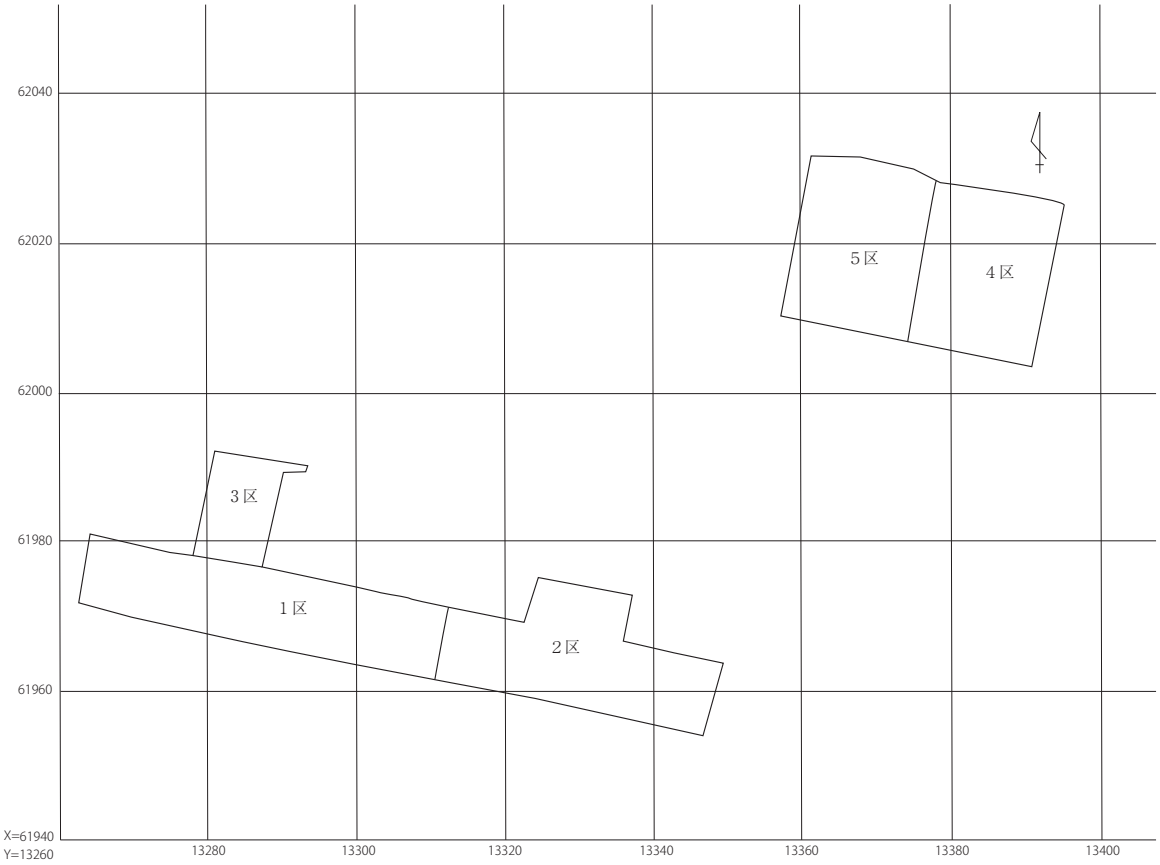


図 2　調査区配置図

0　20m
(S=1/1000)

3．調査の方法（図 2）

今回の発掘調査では、事前に試掘確認調査を行い遺跡の存在する範囲、深さ等を確認したうえで工事により影響を受ける範囲を本調査の対象とし、平成 22 年 1 月から新校舎建設部分で実施した。武道館建設地点については、建設予定場所が確定してから本調査を行うこととなった。武道館建設予定地の調査内容については次回報告する。

調査にあたっては、調査区内に任意の 4m メッシュグリッドを設定し、南北ラインをアルファベット、東西ラインをアラビア数字で表し、グリッド名称とした。測量もこのグリッドにより行い、最終的には世界測地系公共座標第Ⅳ系に取り付け遺構図面を作成した。

また、廃土置場が調査区内に必要であるため便宜的に調査区を 1 ～ 3 区に分け、順次調査を行った。

4．試掘確認調査（図 3・4）

試掘確認調査は、卒業式、入学式などの学校行事を避け、平成 21 年 3 月 16 日～ 27 日と 5 月 11 日～ 15 日の 2 回に分けて実施した。

試掘確認調査の時点では、新校舎の建設場所が決定されていなかったため、現校舎（北舎、南舎、

体育館等）周辺の中庭、駐車場、グラウンドなどの調査可能地点に3m × 3mを基本とする調査トレンチを9か所設定した。図4の土層柱状図の深さは、地表面を0として、地表面からの深さを示している。

東端のプール建設予定地に設定したTP1・8・9では遺構が確認できず、東側の下田川に向かって落ち込む旧地形が確認されたのみであった。そのため、この地点では本調査の必要はないと判断した。

校庭内のTP2～7では全体に40～70cmの敷地造成時の盛土があり、その下が旧耕作土面であった。一部旧校舎等の基礎により破壊されている部分があるものの、すべてのトレンチで土坑や溝、ピットが検出された。TP2では、4層に弥生土器を多量に含み、5層上面でピットが検出された。遺物量の多さなどから、4層は竪穴建物跡の埋土と考えられる。4層から出土した土器はタタキ調整のものが多いが、そのうち3点を図示した。TP5では南北方向の溝、TP6・7ではピットが検出されているが遺構密度は低い。遺物は、TP2・3ではまとまって土器が出土しているが、その他のトレンチではほとんど土器は出土していない。これらの結果から、調査区域が西野々遺跡の広がりの南端にあたると考えられる。

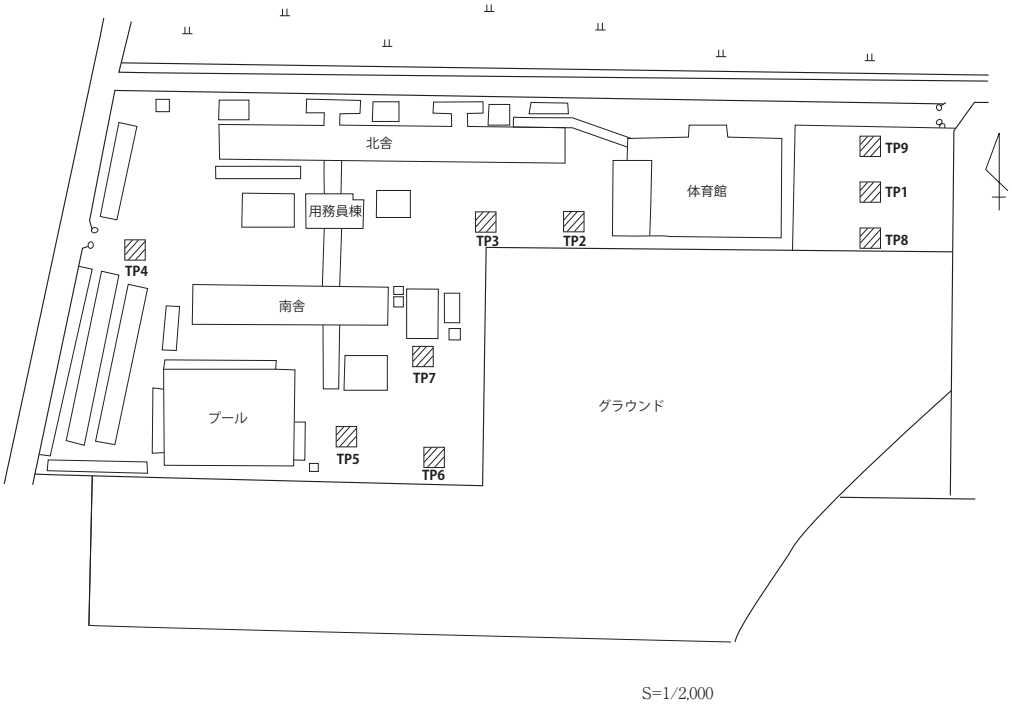


図3　試掘トレンチ位置概略図

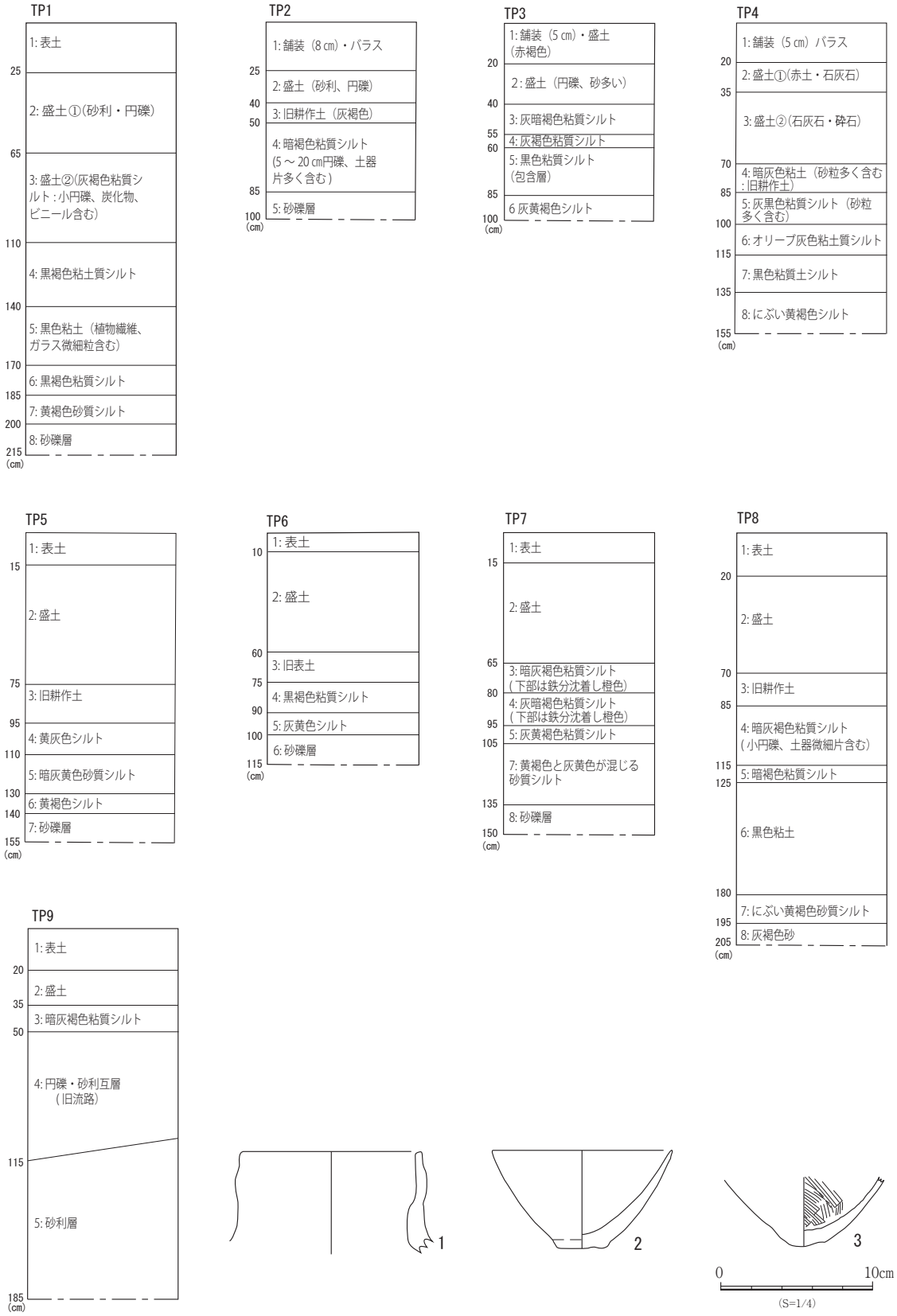


図 4　試掘トレンチ土層柱状図及び出土遺物実測図

第Ⅱ章　周辺の地理的・歴史的環境

１．地理的環境

西野々遺跡の所在する南国市は、北緯 33 度 34 分、東経 133 度 38 分に位置し、東西約 12㎞、南北約 23㎞、面積 125.35㎢を測る。高知県のほぼ中央部にあたり、東を香美市･香南市、西を高知市、北を土佐町・本山町と接し、南は土佐湾から太平洋に開ける。人口は 2014 年 1 月現在で 48,688 人である。主な産業は農業であり、かつては米の二期作の中心地であった。現在は 7 月の中旬には刈り入れを始める早場米の産地として知られている。海岸部では施設園芸が盛んなほか、十市のヤマモモ、白木谷の四方竹などの特産品も有名である。高知龍馬空港、高速道路、JR 土讃線、ごめん・なはり線、路面電車などの交通の結節点であり、高知新港も近く高知県の物流拠点としての役割をもつ。

市域の北半分は四国山地より連なる山地で占められる。その大部分は古生代ペルム紀の上八川層と白木谷層によって形成される。市域の北境界線付近では、上八川層の標高は約 800m に達するが、南下するに従って次第に高度を下げ、白木谷層では標高 300 ～ 400m となり、やがて標高 150m 前後の丘陵となって、ついには平野に没してゆく。

市域の南半分を占める平野部は、物部川や国分川・舟入川の堆積作用により形成された扇状地であるが、高知平野の東部を占め、長岡郡と香美郡にまたがることから香長平野とも呼ばれている。香長平野は、舟入川を境に北側を古期扇状地、南側を新期扇状地に二分できる。古期扇状地は洪積世の最終氷期に形成された礫層堆積物でおおわれており、長岡台地と呼ばれている。一方、新期扇状地は物部川の堆積作用による沖積平野であり、香長平野の大部分を占める。ここでは自然堤防がよく発達し、その上には南四国における弥生時代の拠点的集落である田村遺跡群をはじめ、弥生時代の集落跡が多数分布している。

西野々遺跡は香長平野の南部に所在し、遺跡の南西縁には標高 120m 前後の丘陵が横たわり、丘陵北麓から東麓にかけて広がる弥生～近世の複合遺跡である。遺跡の東縁から南に向かって下田川が流れており、下流の川沿いには中組遺跡や里改田遺跡などが分布する。また、県内最大級の面積を有する田村遺跡群は南東約 2㎞の位置に所在する。

２．歴史的環境

南国市は洪積平野と沖積平野を有し、古くから人々の生活に適した地であった。その営みの痕跡である遺跡の数は 295 にのぼる。これは高知県の遺跡総数の約 1 割を占め、県下で最も遺跡の分布が集中する地域である。平野部を中心に旧石器時代以降の各時代の遺跡の存在が知られており、それぞれの時代について概観する。

①旧石器時代

高知平野周辺では、南国市との境である高知市介良の高間原古墳群 1 号墳の石室流入土中より出土した 1 点の細石器が知られるのみであり、「旧石器の空白地帯」と称されるほどその様相はほとんど判明していなかった。平成 6 ～ 8 年にかけて四国横断自動車道の建設に伴う発掘調査が行

われた奥谷南遺跡(南国市岡豊町)において、細石刃 400 点、細石核 150 点、ナイフ形石器 50 点などが出土した。AT 上層にナイフ形石器と細石器文化期の 2 枚の文化層があり、層中から植物食利用を示す叩石が共伴することが明らかになった。

②縄文時代

縄文時代の遺跡は県西部の四万十川流域に比べて少なく、数ヶ所が確認されているにすぎない。奥谷南遺跡では草創期～中期の土器、中期末の堅果類の貯蔵穴が出土した。奥谷南遺跡の南麓である栄エ田遺跡(南国市岡豊町)からは、後期初頭～晩期終末の土器と共に 30 点程の磨製石斧が出土した。これらの遺跡は、 丘陵部が平野部に接する地に立地しており、狩猟・採集に適した地域である。南の平野部では、田村遺跡群(南国市田村)の第 1 期調査(1980 ～ 1983 年)で後期の彦崎ＫＩ式土器が、第 2 期調査(1997 ～ 2000 年)で鐘崎式土器が出土し、九州との関連が窺える。

③弥生時代

弥生時代になると遺跡数とその規模は、急激に発展する。稲作に適した広大な沖積平野を有することから、平野部のほぼ全域に遺跡が展開している。

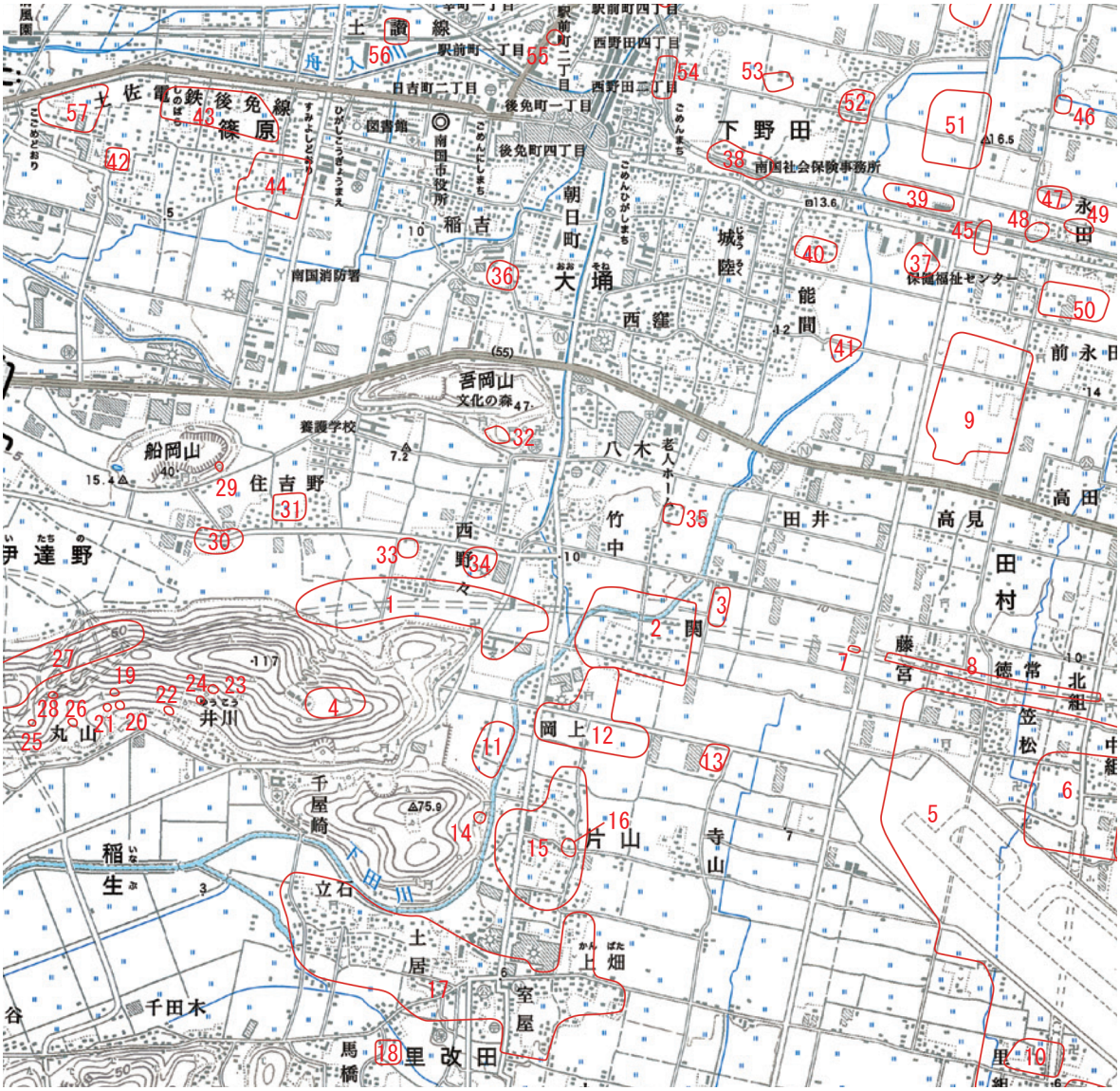
なかでも田村遺跡群は、その規模において群を抜いており、高知平野における拠点的母村集落と考えられる。第 1 期調査では前期初頭の集落跡と小区画水田跡、中期末から後期前半の集落跡が出土し、検出された竪穴建物跡は 60 棟、掘立柱建物跡も 14 棟にのぼる。第 2 期調査では前期の環濠集落と前期末～中期前半の集落、中期後半～後期中葉の集落が移動を伴って変遷している様子が確認された。検出された竪穴建物跡は 453 棟、掘立柱建物跡は 198 棟にものぼる。

田村遺跡群周辺の地域や中小河川流域では、前期後半～末葉にかけて小規模ながら大篠小学校校庭遺跡(南国市大埇)、栄エ田遺跡、岩村遺跡(南国市福船)などの遺跡が散見されるようになる。中期になると遺跡数は一転して激減し、特に中期前半の遺構は高知平野ではほとんど見られなくなり、田村遺跡群で土坑や竪穴住居が少数確認されているのみである。中期後半～後期中葉にはピークを迎えた田村遺跡群が衰退する一方、周辺部にあたる東崎遺跡(南国市東崎)、岩村遺跡、小籠遺跡(南国市岡豊町)などの中小集落が後期中葉～終末にかけて成立し、高知平野一帯に爆発的に展開していく。

④古墳時代

南国市岡豊町・久礼田・植田の平野と接する丘陵部は高知県最大の後期古墳の密集地である。なかでも小蓮古墳は県下最大の横穴式石室をもつ円墳であり、香長平野北部を中心とする有力豪族の墳墓と考えられる。22 基の古墳からなる県下最大の群集墳である舟岩古墳群もこの地域に築造されている。従来、高知平野における前期古墳はその存在が全く知られてなかったが、平成 6 年の四国横断自動車道に伴う長畝古墳群(南国市岡豊町)の調査で、同一丘陵上から 4 世紀前半・5 世紀後半・6 世紀前半の古墳(長畝 2 ～ 4 号墳)が確認された。

集落は弥生時代後期終末から引き続き営まれる古墳時代初頭の集落は香長平野で数多く調査されている。古墳時代中期以降の調査例は少ないが、土佐国衙跡(南国市比江)ではこれまでの調査で 42 棟の竪穴建物跡が出土している。



(S=1/25,000)

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	西野々遺跡	弥生～近世	20	馬背東2号墳	古墳	39	桧物ヶ内遺跡	古墳～平安
2	関遺跡	弥生・古代	21	馬背西1号墳	古墳	40	ヌメル遺跡	弥生～平安
3	関町田遺跡	弥生	22	馬背古墳	古墳	41	渕ヶ上遺跡	弥生～平安
4	向山防空陣地関連遺跡	近代	23	井川山1号墳	古墳	42	北野寄遺跡	弥生～平安
5	田村遺跡群	縄文～近世	24	井川山2号墳	古墳	43	若宮ノ東遺跡	弥生～中世
6	田村城跡	中世	25	丸山五輪塔	中世	44	北泉遺跡	弥生～平安
7	田村西遺跡	弥生	26	丸山古墳	古墳	45	表中内遺跡	弥生～平安
8	田村北遺跡	弥生・古代・中世	27	向山戦争遺跡	近代	46	柚木内遺跡	古墳～平安
9	修理田遺跡	弥生～平安	28	坂ノ松古墳	古墳	47	上横田遺跡	古墳～平安
10	千屋城跡	中世	29	住吉山1号墳	古墳	48	平杭遺跡	弥生・古墳
11	西ノ芝遺跡	弥生～中世	30	野津合遺跡	古墳～平安	49	大北遺跡	弥生～中世
12	岡の上組遺跡	弥生～中世	31	乱戸遺跡	弥生～平安	50	高添遺跡	弥生～平安
13	鹿枝遺跡	弥生～平安	32	吾岡山南遺跡	古墳～平安	51	横落遺跡	弥生～平安
14	秋葉山南平古墳	古墳	33	神田遺跡	古墳～平安	52	野田土居城跡	中世
15	中組遺跡	弥生～中世	34	郷の前遺跡	古墳	53	弊串遺跡	古墳～平安
16	片山土居城跡	中世	35	八木土居城跡	中世	54	カド遺跡	古墳～平安
17	里改田遺跡	弥生～中世	36	大篠遺跡	弥生	55	西鴨塚遺跡	古墳～平安
18	里改田土居城跡	中世	37	カントヲリ遺跡	縄文・古墳～平安	56	野中廃寺跡	平安
19	馬背東1号墳	古墳	38	門田遺跡	古墳～中世	57	忠兵衛遺跡	中世

図5　西野々遺跡周辺の遺跡

⑤古　代

古代の律令制度のもとでの土佐国を伝える遺跡として、比江廃寺跡や土佐国衙跡、土佐国分寺跡が所在しており、古代土佐の政治・文化の中心地であったことを示している。

比江廃寺跡(南国市比江)は白鳳時代の瓦が出土した寺院跡であり、現存している塔心礎は原位置を保っており、8世紀以降に据えられたことが発掘調査により確認された。土佐国衙跡では、昭和54年から31次にわたる確認調査が行われ、官衙を構成すると考えられる掘立柱建物群などが検出されているが、政庁などの国衙中枢の遺構は確認できていない。土佐国衙跡の北方1㎞に位置する白猪田遺跡(南国市久礼田)では地鎮祭祀の跡や緑釉輪花皿が出土し、「国府集落」としての性格づけがなされている。土佐国分寺跡(南国市国分)では現状変更に伴う調査および伽藍配置確認のための調査が行われ、礎石建物跡、掘立柱建物跡などが検出されている。

⑥中　世

中世になると遺跡数も増加し、分布も平野部の城館跡や山麓部の山城跡などほぼ全域にわたる。現在確認されている南国市内の中世城館跡は47ヶ所にのぼる。これらに伴い生活域も拡散し、現在我々が目にしている景観の基礎がほぼ形成された。

長宗我部氏の居城であった岡豊城跡は詰、詰下段、三ノ段などから礎石建物跡が検出され、史跡公園として整備されている。近年、南斜面の伝家老屋敷曲輪の調査も進められ、国分川から詰への登城ルートが推定されている。岩村土居城跡(南国市福船)では城を囲む2重の堀が発掘された。この堀は出土遺物から14～15世紀に機能していたと考えられる。

田村城跡は14～15世紀の守護代細川氏の居館であり、城郭は3重の堀で囲まれた複合城郭である。郭内には区画溝や掘立柱建物跡が存在しており、外堀の幅は4～5m、深さ3.5mを測り、土師質土器や護符が出土している。高知空港拡張に伴う田村遺跡群発掘調査では、田村城跡の南側で溝に囲まれた屋敷跡が31ヶ所検出されており、南北朝期に機能したもの、守護代細川氏の入部後に機能したもの、長宗我部氏の台頭期に機能したものの3時期に区分することができる。

⑦近世以降

山内氏の土佐入国による高知城築城以降、土佐の中心地は高知市域に移った。長岡台地は当時未墾の荒地であったが、藩政初期の野中兼山による新田開発の際、諸役・諸税御免として入植を奨励し、御免町が生まれた。今は後免と改められ、南国市の中心街となっている。

近年、戦争遺跡を平和学習に積極的に活用していこうという動きが全国的に見られているなか、陣山遺跡では海軍の送信所跡地が発掘され、砲弾類が多数出土した。向山防空陣地関連遺跡では、「本土決戦」に備えた尾根上の陣地の構造が明らかにされている。また南国市前浜には、旧高知海軍航空隊所属の飛行機の格納庫であった掩体が7基残存しており、平成18年2月に南国市史跡「前浜掩体群」として指定をされた。

参考文献

『南国市史 上巻・下巻』南国市教育委員会　1979 年
松村信博『奥谷南遺跡Ⅰ』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター　1999 年
松村信博『栄エ田遺跡』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター　1995 年
『高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 田村遺跡群』高知県教育委員会　1986 年
『田村遺跡群Ⅱ』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター　2004 年
三谷民雄『岩村遺跡群Ⅳ』南国市教育委員会　1999 年
出原恵三『小籠遺跡Ⅲ』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター　1997 年
廣田佳久･池澤俊幸『長畝古墳群 高知自動車道(南国～伊野)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター　1996 年
『土佐国衙跡発掘調査報告書 第１～11 集』高知県教育委員会・南国市教育委員会　1980 ～ 1991 年
三谷民雄『白猪田遺跡』南国市教育委員会　1997 年
山本哲也『土佐国分寺跡 第１～３次発掘調査概報』南国市教育委員会　1988 ～ 1991 年
宅間一之『高知県南国市 中世城館跡』南国市教育委員会　1985 年
三谷民雄『岩村遺跡群Ⅲ』南国市教育委員会　1998 年
森田尚宏・松田直則・岡本桂典『岡豊城跡』高知県教育委員会　1990 年
出原恵三・吉成承三・浜田恵子・佐竹 寛『陣山遺跡、陣山北三区遺跡』
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター　1997 年
久家隆芳『岡豊城跡Ⅲ』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター　2002 年
廣田佳久・小野由香『西野々遺跡Ⅰ』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター　2008 年
廣田佳久『西野々遺跡Ⅱ』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター　2011 年
廣田佳久『西野々遺跡Ⅲ』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター　2011 年
出原恵三『向山戦争遺跡』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター　2012 年
松本安紀彦『祈年遺跡Ⅰ』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター　2011 年
近藤孝文『祈年遺跡Ⅱ』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター　2012 年
前田光雄『祈年遺跡Ⅲ』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター　2012 年

第Ⅲ章　調査の成果

1．調査の概要と基本層序

今回の調査では、1,050㎡を調査し、竪穴建物跡７棟(竪穴状遺構３棟含む)、掘立柱建物跡３棟、土坑29基、溝14条等が検出された。時期としては、判別できないものも多いが、弥生時代・古代～中世に属するものが多い。調査では、上層での遺構検出が困難であったため、すべての遺構はⅥ層暗褐色砂(地山)の上面で遺構検出を行った。

調査区中央部は礫層の露出があり、その付近に位置する竪穴建物跡は削平が著しく壁体はほとんど残っていない。周辺で検出された楕円形のピットとその周りの小ピットが竪穴建物跡の柱穴の可能性もある。

基本層序は、約100cmある厚い造成土を除去するとⅠ層旧耕作土があり、その下に酸化鉄の沈着したⅡ層橙褐色粘質シルトとⅢ層褐灰色粘質シルトが広く堆積しているが、遺物はほとんど含まない。SD1をはじめとする古代・中世の遺構はⅣ層褐灰色土上面から掘り込んでおり、SD10などの弥生時代の遺構はⅤ層黒褐色粘土上面から掘り込んでいることが調査区壁面から確認できる。Ⅴ層およびⅤ'層は、部分的にしか残っておらず、ほとんどの部分で削平を受けていたために確認できなかった。Ⅵ層から下は地山で、暗褐色砂、黄灰色砂が堆積し、さらに下層は河床礫層となる。

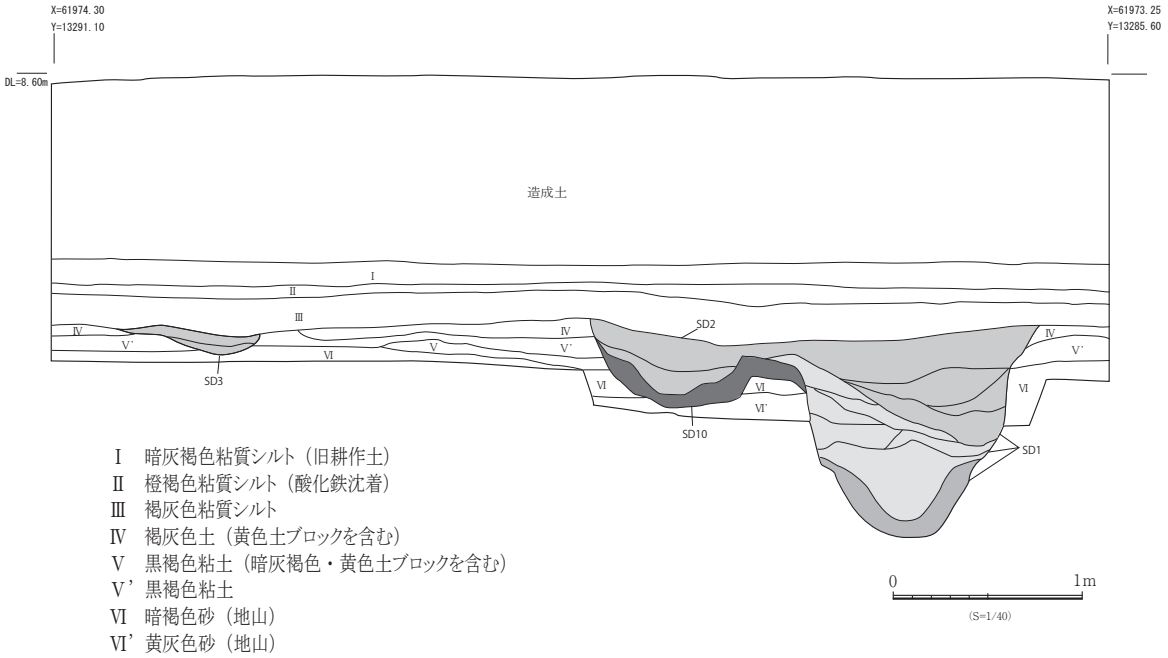


図６　調査区土層図

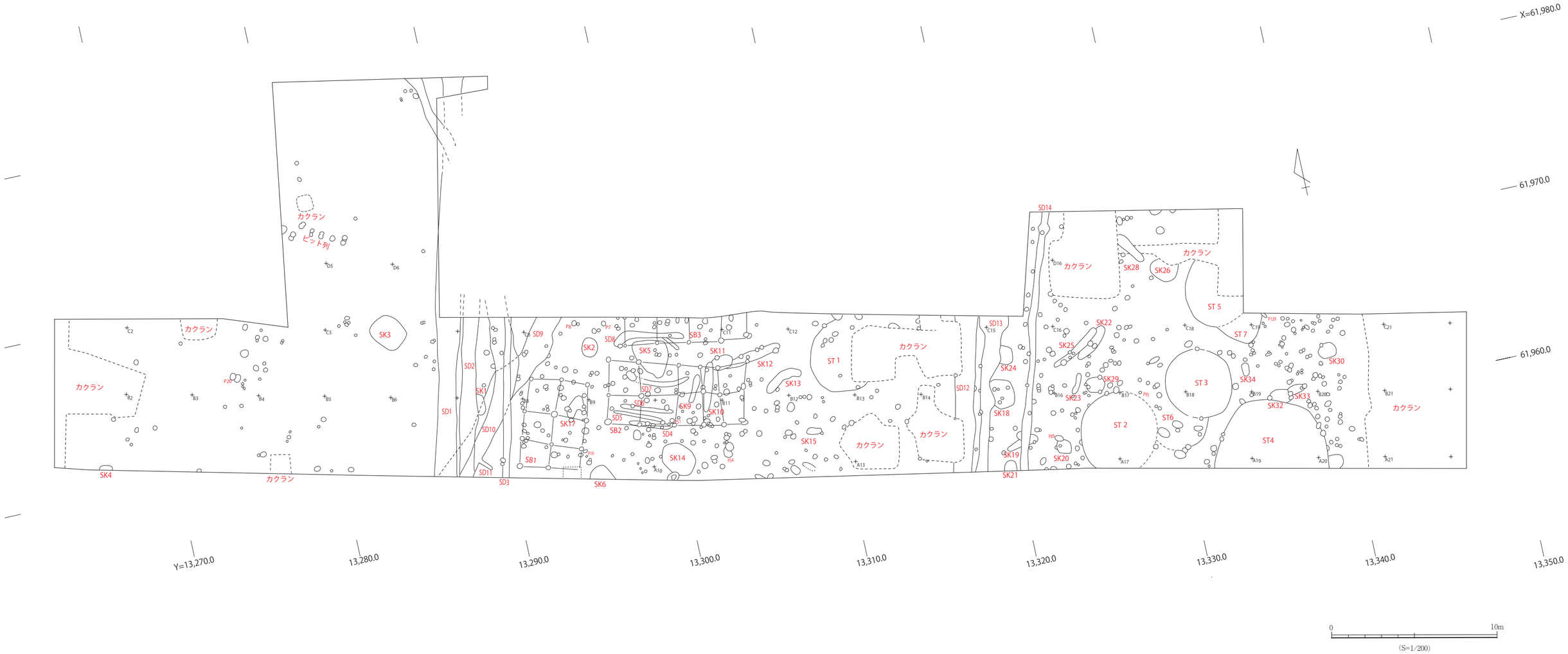

X=61,980.0
61,970.0
61,960.0
Y=13,270.0
13,280.0
13,290.0
13,300.0
13,310.0
13,320.0
13,330.0
13,340.0
13,350.0
カクラン
ヒット列
SK3
SK2
SK1
SK4
SK5
SK6
SK7
SK8
SK9
SK10
SK11
SK12
SK13
SK14
SK15
SK17
SK18
SK19
SK20
SK21
SK22
SK23
SK24
SK25
SK26
SK28
SK29
SK30
SK32
SK33
SK34
SD1
SD2
SD3
SD4
SD5
SD7
SD8
SD9
SD10
SD11
SD12
SD13
SD14
SB1
SB2
SB3
ST 1
ST 2
ST 3
ST4
ST 5
ST6
ST 7
P20
P8
P7
P16
P54
P95
P89
P129
0
10m
(S=1/200)

図７　遺構全体図

２．検出遺構と出土遺物

（１）竪穴建物跡

ST1（図８）

１区北東側 C12 グリッドに位置し、北側の一部は調査区外である。東側は旧校舎基礎に破壊される。削平のため残存状態は悪い。埋土の深い部分は約 7cmしかなく、北側は床面直上で検出した。長円形プランを呈しているが、南側の壁体のカーブから直径約 4.5m の円形住居と北側にもう１棟が切り合っている可能性がある。

付属遺構のうち中央ピットはほぼ中央に位置し、楕円形で大小２つのピットが切り合っているような形状をしているが、埋土の判別がつけがたく、断面観察でも切り合い関係を判別できなかった。西側の小さいピットは長さ 77cm、幅 57cm、深さ 18cm、東側の大きいピットは長さ 70cm以上、幅 77cm、深さ 22cmである。主柱穴は P1 ～３の３本が検出され、北東側が撹乱により確認できないが、配置から４本柱と考えられる。柱間距離は P1-P2 間が 1.71m、P2-P3 間が 2.25m である。

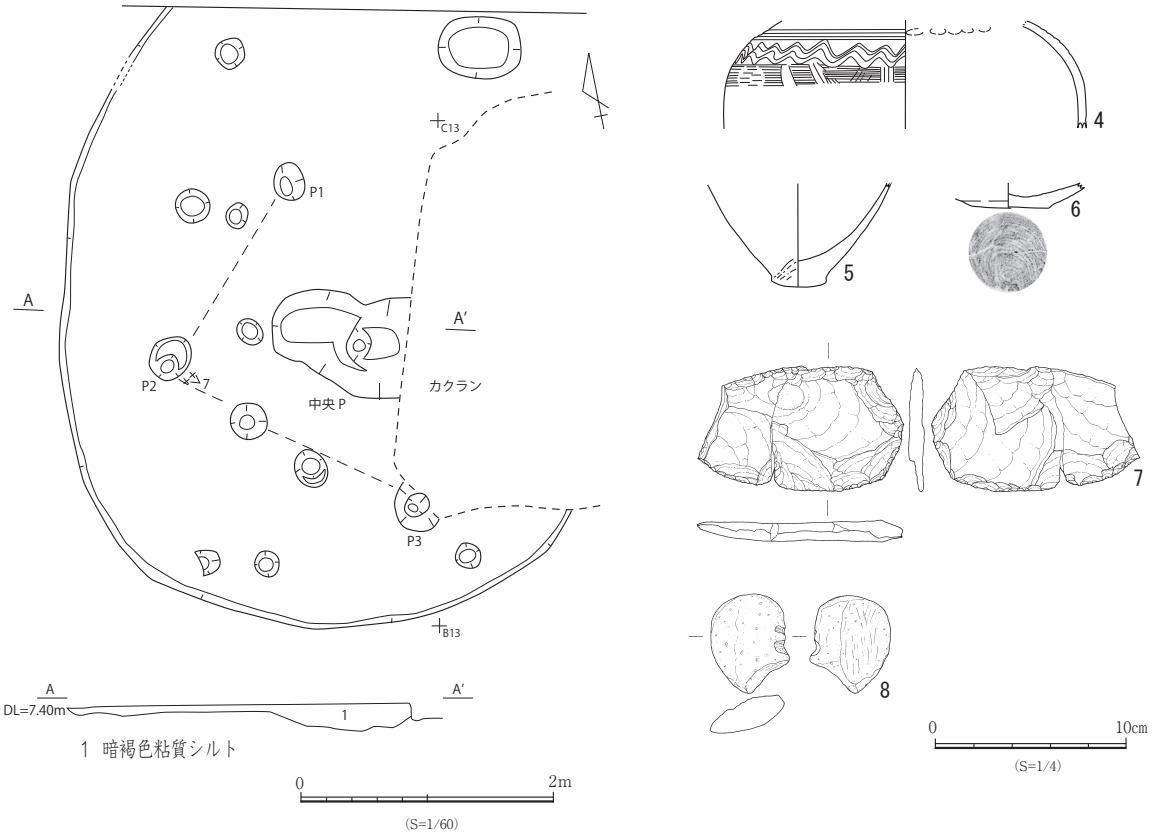


図８　ST1 遺構図及び出土遺物実測図

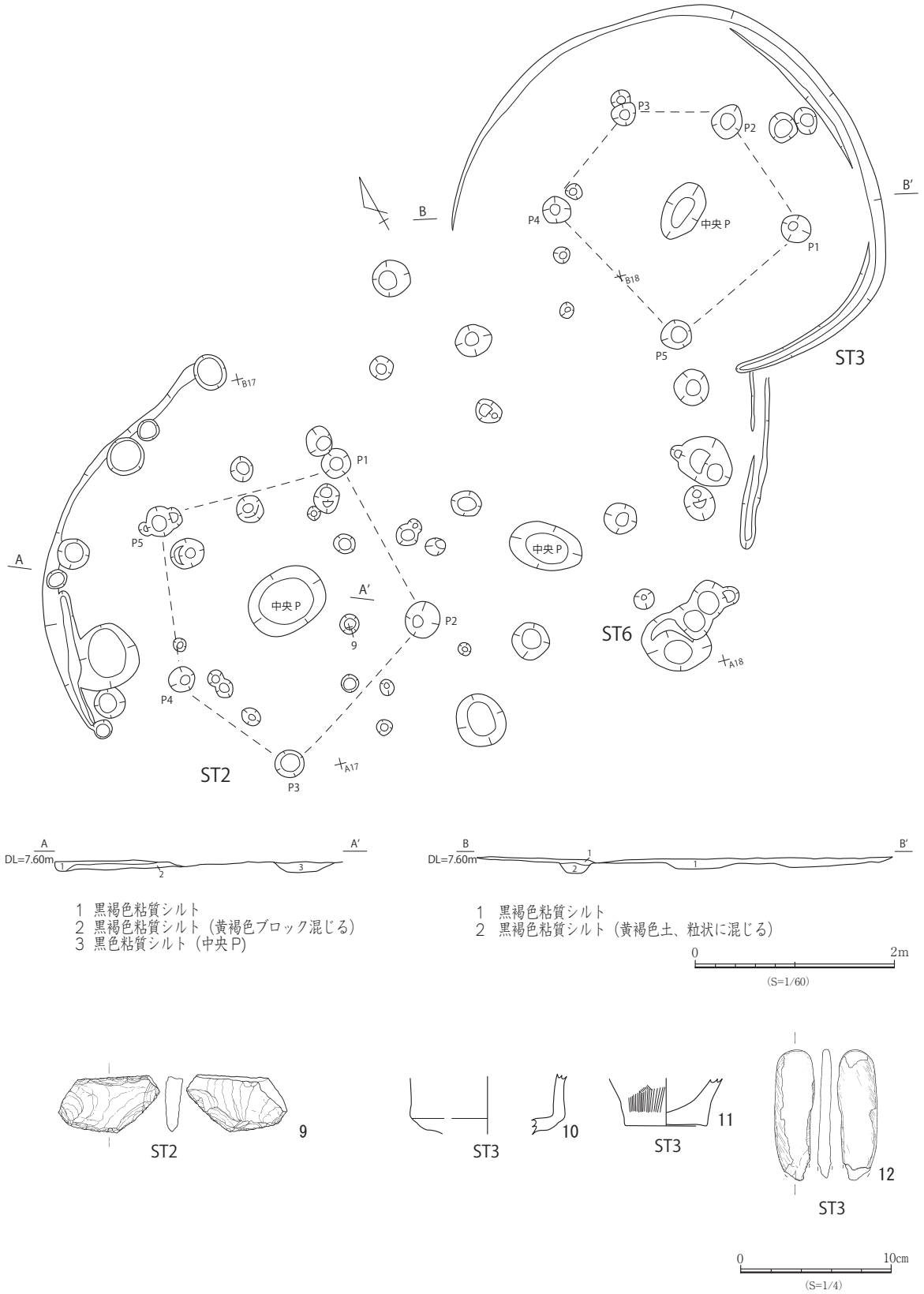


図 9　ST2・3・6 遺構図及び ST2・3 出土遺物実測図

遺物は110点出土したうち、弥生土器2点、土師質土器1点、石器2点を図示した。4は壷胴部で、肩部に沈線と波状文が4条施文される。上部破面は接合痕が残る。5は底部で、ボタン状に突出した底部付近の外面に若干タタキが残るほかはナデ消される。6は土師質土器の底部である。遺構検出面で出土しており混入と考えられる。7はサヌカイトのスクレイパーである。P2の東側で出土した2点が接合した。刃部には使用による摩耗がみられる。8は軽石である。

ST2（図9）

2区中央部南側B16～17グリッドに位置し、南側の一部が調査区外である。削平のため残存状態は悪い。ほぼ床面直上での検出であり、埋土は西側に2～3㎝残るのみである。西側にわずかに壁体溝が残り、壁体のカーブから、直径4.54mの円形住居と考えられる。

付属遺構のうち中央ピットはほぼ中央に位置しており、長さ78㎝、幅62㎝、深さ8㎝の楕円形である。主柱穴は5本検出され、ほぼ正五角形の配置である。柱間距離は1.36～1.91mである。

遺物は134点出土したうち、図示できたものは石器1点である。9はサヌカイト製のスクレイパーで、中央ピット東脇のピット中から出土した。上部に自然面が残り、刃部には摩耗がみられる。

ST3（図9）

2区中央部C17～18グリッドに位置する。削平のため残存状態は悪く、ほぼ床面直上の検出である。平面プランはやや不整円形であるが、直径4.38mの円形住居と考えられる。

付属遺構のうち中央ピットはほぼ中央に位置しており、長さ61㎝、幅38㎝、深さ9㎝の楕円形である。主柱穴は5本検出され、五角形の配置である。柱間距離は1.05～1.76mである。壁体溝は南側と東側に一部残存し、幅26㎝、深さ3㎝である。

遺物は148点出土したうち、図示できたものは弥生土器2点、石器1点である。10は高坏の屈曲した坏部片である。類例として、下ノ坪遺跡でブランデーグラス形の高坏が報告されている。11は平底の底部である。12は、左側面をよく磨いており、面が形成されている。下部が破損しているため断定できないが、磨製石斧の可能性がある。

ST6（図9）

2区中央部B17～18グリッドに位置する。削平により残存状態は非常に悪い。埋土がほとんどないため平面形状、規模は不明である。また、位置的にST2・ST3と切り合い関係にあるが、新旧は不明である。

中央付近に大きめの楕円形ピットがあり、中央ピットと思われる。また、東側にわずかに壁体溝が残存するが、主柱穴の並びが明確にできないため、竪穴状遺構とする。

遺物は土器細片が6点出土したのみで、図示できるものはなかった。

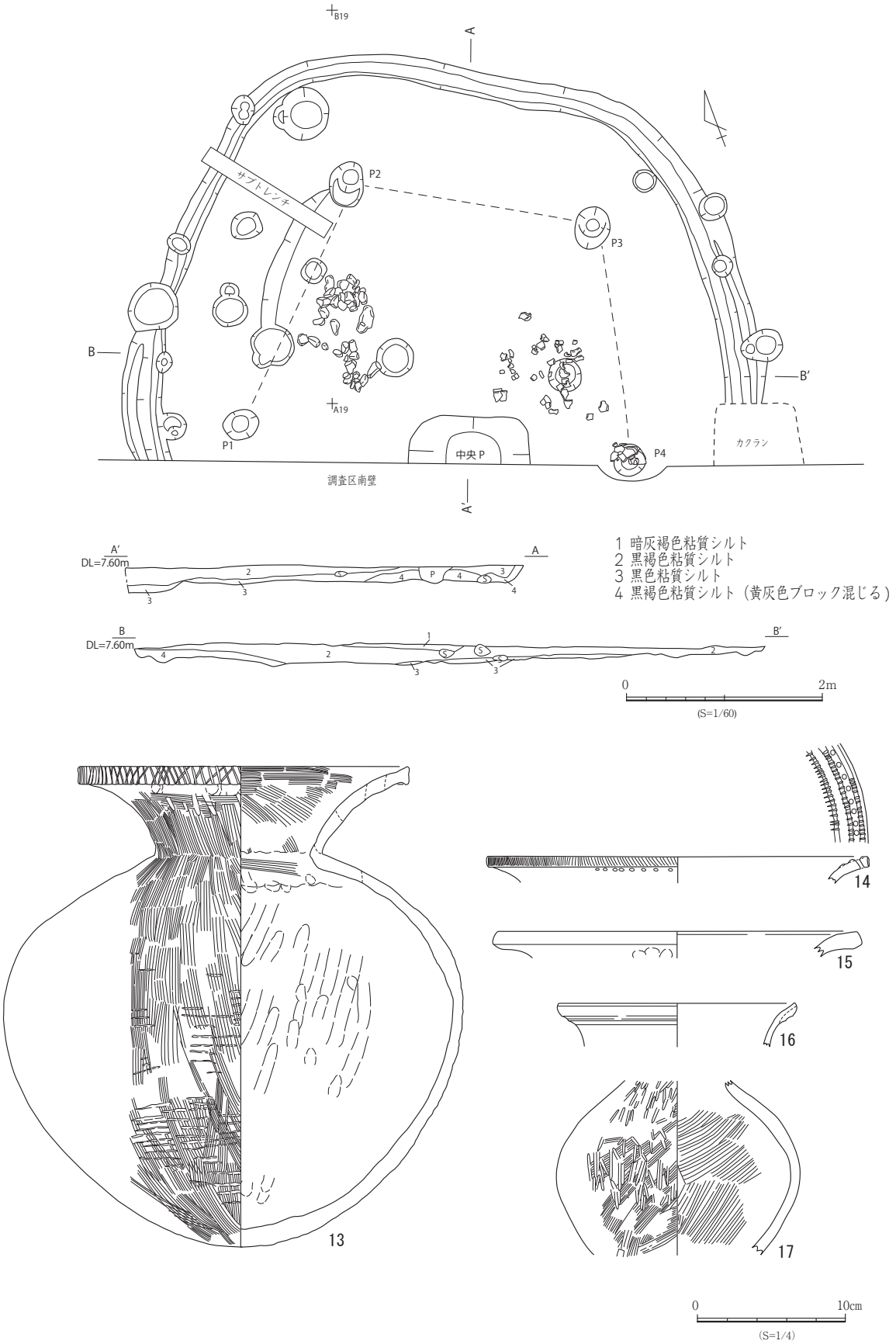


図 10　ST4 遺構図及び出土遺物実測図

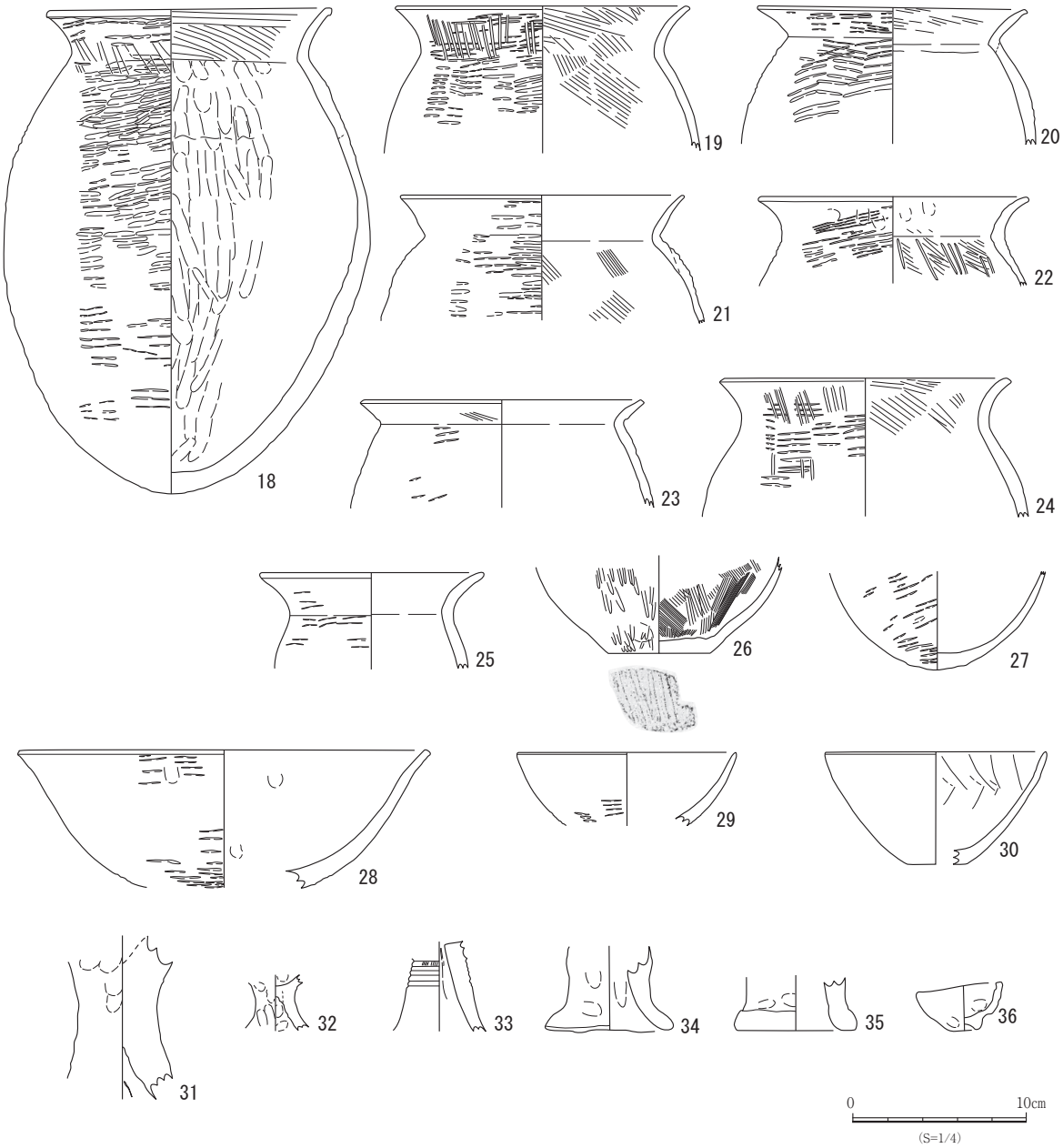


図 11　ST4 出土遺物実測図

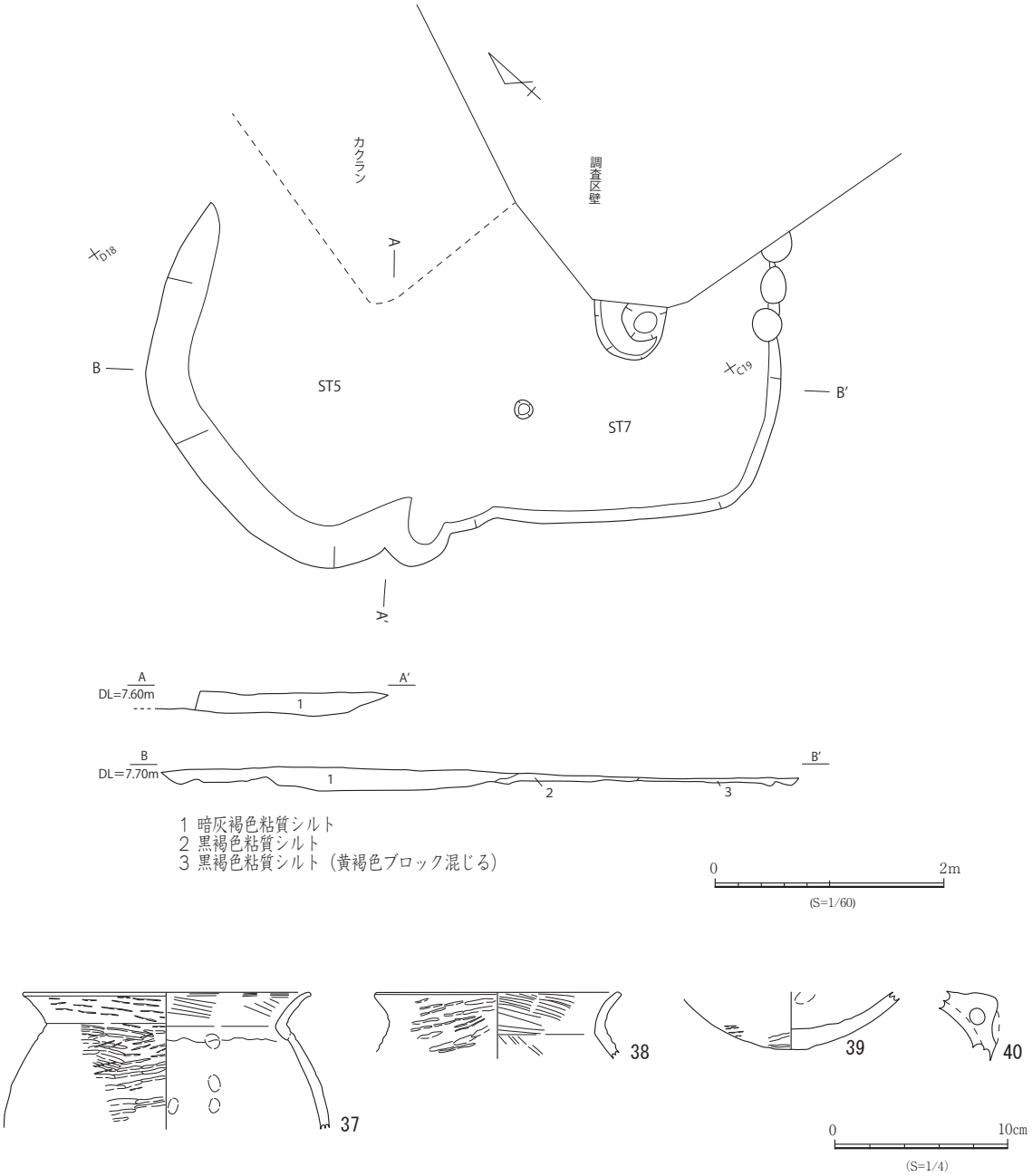


図 12　ST5・7 遺構図及び ST5 出土遺物実測図

ST4（図 10・11）

2 区東側 B18 ～ 19 グリッドに位置する。南側の約半分が調査区外である。残存状態は良く、床面までの深さは深い部分で 25cmある。埋土には円礫が多数含まれており、西側には集石状になっている部分もある。中央ピット北西部の床面には土器が集中しており、18 の甕などが復元できた。

付属遺構のうち中央ピットは調査区南壁際で検出された。検出部分で長さ 125cm、深さ 26cmの隅丸長方形である。位置は想定される建物の中心より約 80cm南に寄る。主柱穴は 4 本検出されており、その配置から五角形の配置と考えられる。柱間距離は 2.44 ～ 2.75m である。それぞれの主柱穴に対応するように、壁際にもピットの並びがある。西側の主柱穴と壁の間には幅約 80cm、長さ約 2m のベッド状遺構を有し、周囲の床面より 3 ～ 4cm高く地山を削り出している。壁体溝を有しており、幅 26cm、深さ 5cmである。

遺物は、弥生土器の壷、甕、鉢、高坏、支脚、手づくね土器等 1,302 点出土した。そのうち図示できたものは 24 点である。18・25・27・31・36 は床面からの出土である。

13 ～ 17・26 は壷である。13 はほぼ完形に復元できた。底部を下にして P4 に落ち込むような形で出土し、ほぼ原位置を保っていると考えられる。口縁部は頸部から大きく外反し、斜格子状の刻みが施される。底部は丸底である。外面はタタキの後にハケ、ミガキ調整、内面は主にナデで、ハケや指頭圧痕もみられる。14 ～ 16 は口縁部で、14 は P4 から出土した。内面に刻目突帯が 3 条と穿孔が施される。15 は西側の壁体溝と切り合っているピットから出土した。16 は粘土帯を貼付して肥厚させている。17 は胴部で、北西隅の壁体溝に隣接したピットから出土した。内外面ともにハケが施され、外面は主に上半部にミガキもみられる。26 は底部で底面、外面ともにミガキ、内面はハケ調整である。焼成も良好で、丁寧な作りである。

18 ～ 25 は甕である。18 は中央ピット周辺の床面に散乱して出土した。ほぼ完形に復元でき、13 と同様に原位置をほぼ保っていると考えられる。外面は全面タタキで、内面は口縁部が横方向のミガキ状の丁寧なハケとナデで、胴部が縦方向の強いナデ調整を施される。19 ～ 25 は上半部で、いずれも外面はタタキ調整である。19 は外面の口縁部に等間隔に縦方向のミガキ調整が施されている。

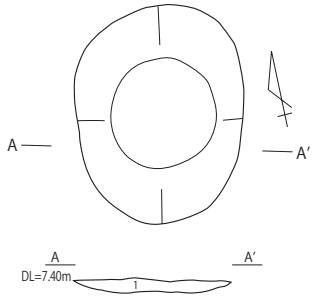
27 ～ 30 は鉢である。28 は口縁部が外反し外面にタタキ目が残る。30 は内面が板状工具によってナデ調整される。

32 は小型土器の脚部で、坏底部が粘土塊で充填される。33 は高坏脚部で、6 条の非常に浅い沈線が施される。31・34・35 は支脚である。いずれも内外面に指頭圧痕がみられる。36 は手づくね土器である。底部は高台状になっており、外面に指頭圧痕がみられる。

ST5・ST7（図 12）

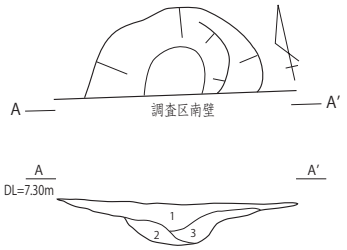
2 区北側 D18 グリッドに位置する。調査時は竪穴建物跡としていたが、いずれも床面に柱穴などの付属遺構がほとんどなく、竪穴状遺構とする。切り合い関係にあり、断面観察から新旧関係は ST7 → ST5 である。

ST5 は不整形で、関連するピットも確認できなかった。埋土は深い部分で約20cm残っており、暗灰褐色粘質シルトである。 遺物は 273 点出土したうち、 弥生土器 3 点、 土師質土器 1 点を図示した。



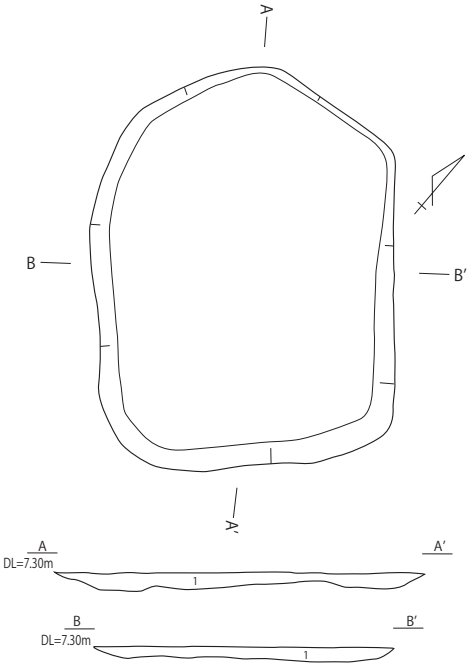
1 黒褐色粘質シルト
(黒色ブロック混じる)

SK2



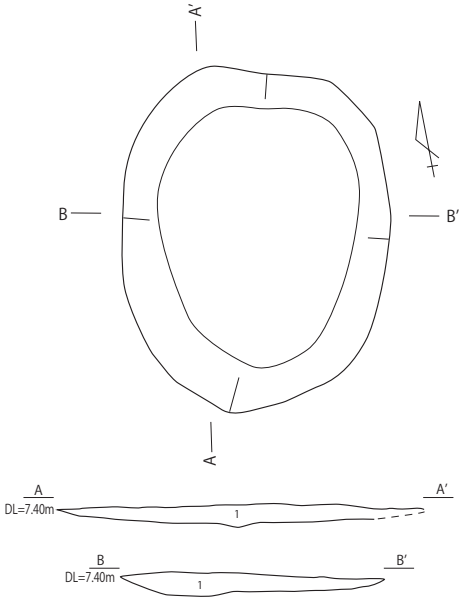
1 暗灰褐色粘質シルト
2 黒褐色粘質シルト
3 暗褐色粘質シルト

SK4



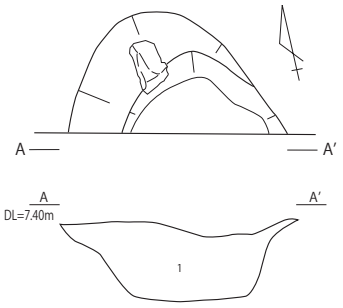
1 黒褐色粘質シルト

SK3



1 暗灰褐色粘質シルト

SK5



1 黒色粘質土

SK6

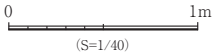


図 13　SK2 ～ 6 遺構図

37・38 は甕の口縁部で外面にタタキ目が残る。39 は甕の底部である。外面にわずかにタタキがみられる。40 は土師質土器の釜の取手で、直径 9㎜の穿孔がある。

ST7 は北側が調査区外である。調査区壁際で楕円形のピット 1 基と、西側で小ピット 1 基が検出された。平面形は検出部分の形状から隅丸方形と考えられる。遺物は土器細片が 2 点出土したのみで、図示できるものはなかった。

（2）土坑

全部で 29 基の土坑を検出した。なお、調査過程で欠番とした遺構については記載していない。

SK1

1 区 B7 グリッドに位置し、SD9 を切り、SD2 に切られる。断面観察で長さ 136㎝、深さ 24㎝で断面皿状の掘り方を確認したが、平面プランは不明瞭であった。埋土上層は暗褐色ブロックの混じる灰褐色粘質シルト、下層は暗灰色、暗褐色、黄灰色土がブロック状に混じる。遺物は土器が 13 点出土したが、図示できるものはなかった。

SK2（図 13）

1 区 C8 ～ 9 グリッドに位置する。楕円形プランを呈し、長軸 115㎝、短軸 88㎝、深さ 8㎝を測る。埋土は黒褐色粘質シルトである。遺物は土器が 14 点出土したが、図示できるものはなかった。

SK3（図 13）

1 区 D5 ～ 6 グリッドに位置する。五角形プランを呈し、長軸 210㎝、短軸 160㎝、深さ 10㎝を測る。埋土は黒褐色粘質シルトである。遺物は全く出土しなかった。

SK4（図 13）

1 区西端 A1 グリッドに位置し、南半分が調査区外である。検出部分では楕円形プランを呈し、検出長 94㎝、深さ 20㎝を測る。遺物は全く出土しなかった。

SK5（図 13）

1 区 C9 ～ 10 グリッドの SD7・8 の間に位置する。不整楕円形プランを呈し、長軸 180㎝、短軸 140㎝、深さ 12㎝を測る。非常に浅く、掘り方は不明瞭である。埋土は暗灰褐色粘質シルトである。遺物は土器が 4 点出土したが、図示できるものはなかった。

SK6（図 13）

1 区 A9 グリッドに位置し、南側の一部が調査区外である。検出部分では方形プランを呈し、検出長 118㎝、深さ 40㎝を測る。埋土は黒色粘質土である。遺物は土器が 37 点出土したが、図示できるものはなかった。

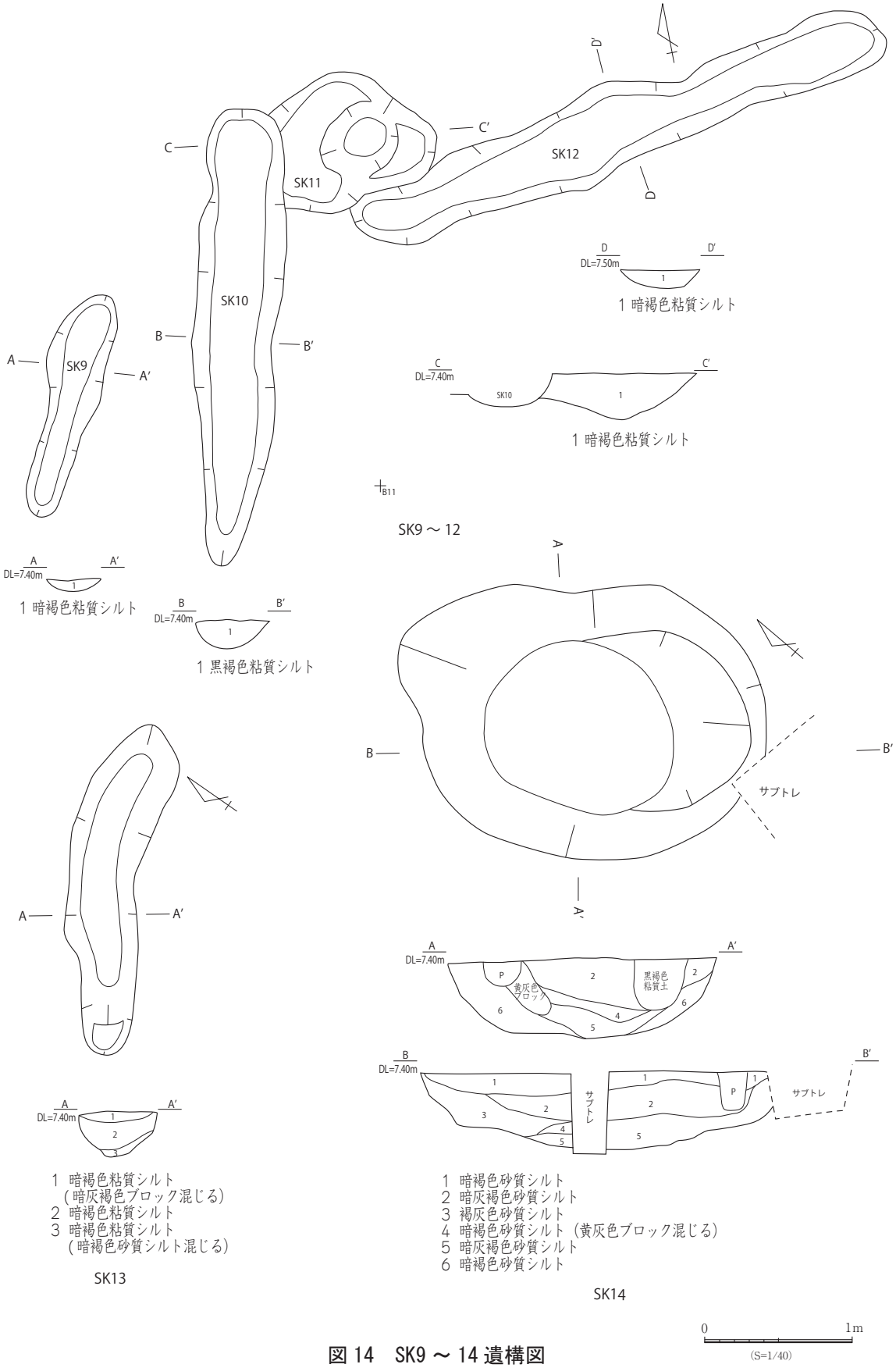


図 14　SK9 ～ 14 遺構図

SK9（図 14）

1 区 B10 ～ C10 グリッドに位置する。南北方向に長い溝状プランを呈し、長さ 156cm、幅 40cm、深さ 8cmを測る。埋土は暗褐色粘質シルトで中央部での断面形状は皿状である。遺物は土器が 3 点出土したが、図示できるものはなかった。

SK10（図 14・17）

1 区 C10 グリッドに位置し、SK11 を切る。南北方向に長い溝状プランを呈し、長さ 310cm、幅 60cm、深さ 20cmを測る。埋土は黒褐色粘質シルトで中央部での断面形状は舟底状である。遺物は土器が 119 点出土したが、図示できるものは 43 の軽石のみである。

SK11（図 14・17）

1 区 C10 グリッドに位置し、SK12 を切り SK10 に切られる。不整楕円形プランを呈し、長軸 110cm、短軸 95cm、深さ 32cmを測る。埋土は暗褐色粘質シルトである。遺物は土器が 37 点出土したが、図示できるものはなかった。ただし、サブトレンチからの出土で SK10・11 のどちらに属するか判別がつかなかったが、41・42 の弥生土器 2 点を図示した。41・42 は甕の口縁部で、41 は貼付口縁に指頭圧痕がみられる。

SK12（図 14）

1 区 C11 グリッドに位置し、SK11 に切られる。東西方向に長い溝状のプランを呈し、長さ386cm、幅 55cm、深さ 12cmを測る。埋土は暗褐色粘質シルトで断面形状は皿状である。遺物は土器が 6 点出土したが、図示できるものはなかった。

SK13（図 14）

1 区 C11 グリッドに位置する。くの字に屈曲した東西方向に長い溝状プランを呈し、長さ 225cm、幅 52cm、深さ 30cmを測る。断面形状は舟底状である。遺物は土器が 24 点出土したが、図示できるものはなかった。

SK14（図 14・17）

1 区 A10 ～ B10 グリッドに位置する。不整楕円形のプランを呈し、長軸 260cm、短軸 185cm、深さ 55cmを測る。遺物は土器が 32 点出土したが、図示できたのは 44 の弥生土器 1 点のみである。薄手の甕の口縁部で、肥厚させた口唇部の下部に指頭圧痕がみられる。

SK15（図 15）

1 区 B12 グリッドに位置する。長楕円形プランを呈し、長軸 105cm、短軸 50cm、深さ 24cmを測る。遺物は全く出土しなかった。

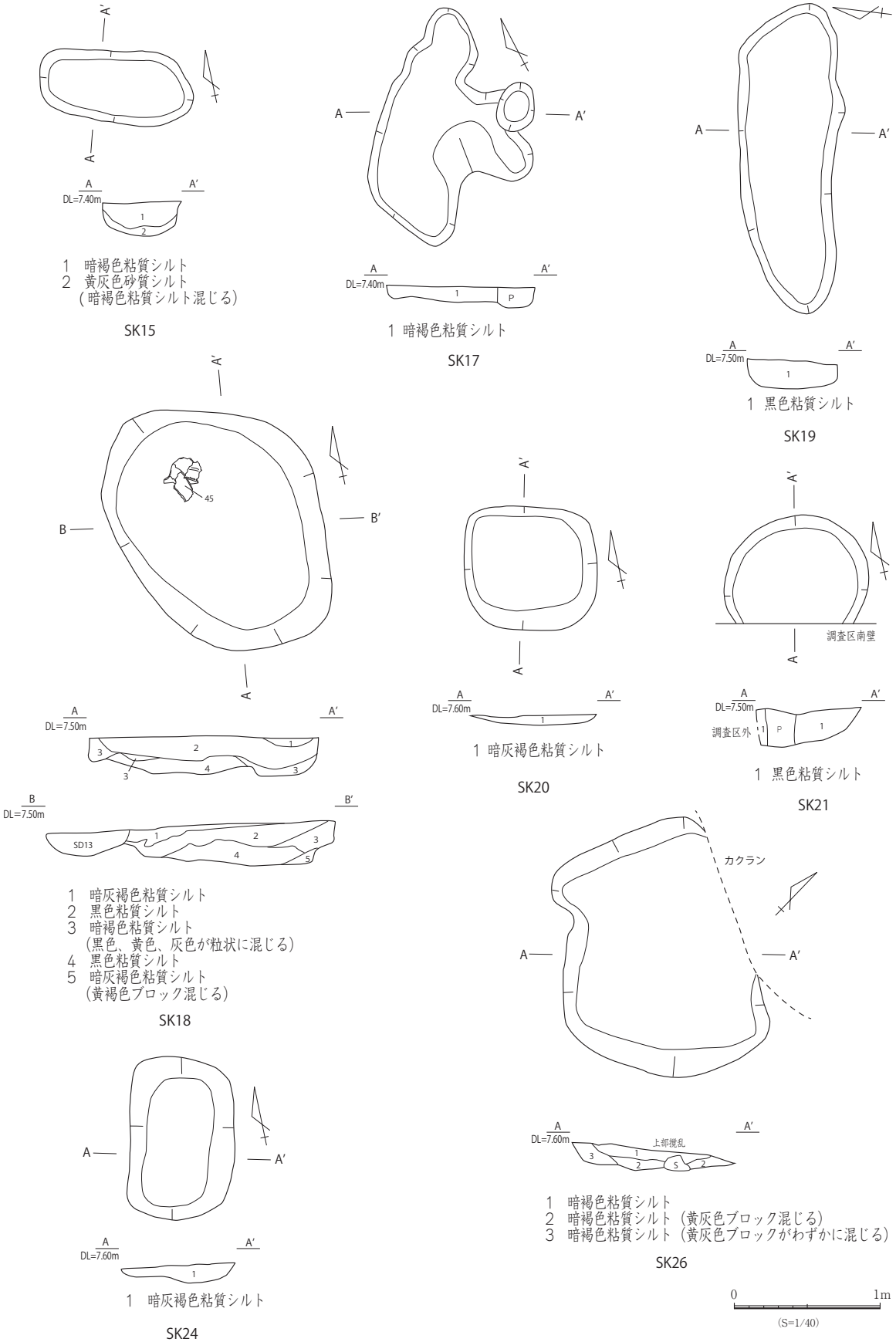


図 15　SK15・17 ～ 21・24・26 遺構図

SK17（図 15）

1 区 B8 グリッドに位置する。掘り方が不明瞭で不整形のプランを呈し、長さ 160cm、幅 110cm、深さ 10cmを測る。埋土は単一で暗褐色粘質シルトである。遺物は土器が 13 点出土したが、図示できるものはなかった。

SK18（図 15・17）

2 区 B15 ～ C15 グリッドに位置し、西側を SD13 に切られる。不整楕円形プランを呈し、長軸 192cm、短軸 142cm、深さ 30cmを測る。遺物は土器が 111 点出土し、弥生土器 2 点を図示した。45は甕で、北側の底面からやや浮いた位置でつぶれた状態で出土した。口唇部に刻目、肩部に沈線 2 条が施される。内外面ともにハケ、ナデ調整である。46 は平底の壷底部である。外面に横方向のミガキ調整が施される。

SK19（図 15・17）

2 区 B15 グリッドに位置し、中央部を SD14 に切られる。東西方向に長い楕円形プランを呈し、長さ 212cm、幅 74cm、深さ 20cmを測る。埋土は黒色粘質シルトである。遺物は土器が 76 点出土したが、図示できたのは弥生土器 1 点である。47 は凹底の底部で外面に縦方向のミガキ調整が施される。

SK20（図 15）

2 区 B16 グリッドに位置する。方形プランを呈し、長軸 90cm、短軸 84cm、深さ 8cmを測る。埋土は暗灰褐色粘質シルトである。遺物は全く出土しなかった。

SK21（図 15・17）

2 区 A15 グリッドに位置し南側の一部は調査区外である。円形プランを呈し、直径 100cm、深さ 26cmを測る。埋土は黒色粘質シルトである。遺物は 53 点出土したうち、弥生土器 3 点、石器 2 点を図示した。48 ～ 50 は弥生土器の壷口縁部である。48 は口唇部の上下端に刻目が施され、内面には 2 条の粘土帯を貼付け、刻目が施される。49は内面に 1 条の粘土帯を貼付け、刻目が施される。50 は外反した口縁端部を拡張して面を形成させる。51・52 は打製石包丁である。どちらも石材は砂岩の円礫で、51 は刃部の調整が若干みられる。52 は打ち欠いただけで刃部に調整はみられないが、刃部と左側縁部の抉りには若干摩耗がみられる。

SK22（図 16・18）

2 区 C16 グリッドに位置し、SK25 に切られる。南北方向に長い溝状プランを呈し、長さ 278cm、幅 66cm、深さ 15cmを測る。埋土は黒色粘質シルトである。遺物は北側に集中した状態で 960 点出土し、そのうち弥生土器 17 点を図示した。

55 ～ 59 は壷である。55 は口縁部から頸部に縦方向のハケ調整の後、3 条の刻目突帯の上下に 2

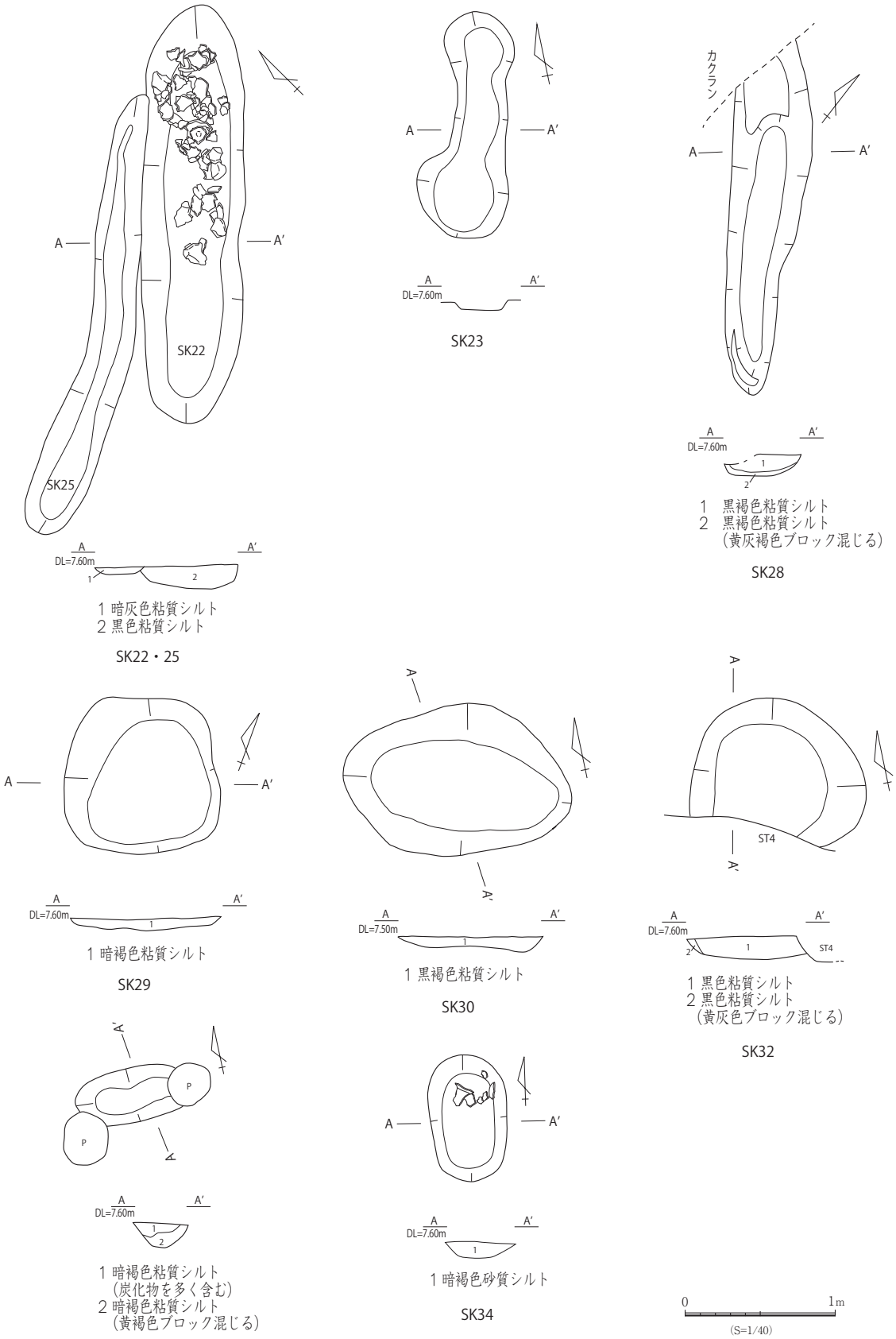


図 16　SK22・23・25・28 ～ 30・32 ～ 34 遺構図

条ずつ、各突帯間には4条ずつの多条沈線が施される。56は頸部片で残存部分の刻目突帯は上部の1条のみで、下部の3条は沈線と刻目で突帯が表現される。突帯間には6条ずつ多条沈線が施される。57・58は大きく外反した口唇部に穿孔があり、58は内面に2条の粘土帯を貼付し、刻目が施される。59は胴部片で、上部は接合面で割れている。2条の沈線の下に摩耗して明瞭ではないが重弧文が施される。

60～62は甕である。60は口縁部に2条、頸部と体部の境に2条の突帯を配している。61・62も頸部と体部の境に3条の突帯を配している。調整は61が外面ハケ、内面ミガキ、62は外面ミガキ、内面ナデである。いずれも内外面とも器面を平滑に仕上げており、丁寧な調整をしている。

63～71は底部である。63は底面が丁寧なナデで、ミガキ状に平滑に仕上げている。67・69は高台状の底部であり、69では、底部円盤の外側に粘土紐を接合し、高台部分をなしていることが断面から観察できる。一方、平底の65・68・71、凹底の66などは底部円盤の上に粘土紐を接合して胴部へと続いている。いずれも弥生前期末～中期初頭にあたる。

SK23（図16）

2区C16グリッドに位置する。南北方向に長い溝状を呈し、長さ150cm、幅60cm、深さ4cmを測る。 北側がややふくらんでおり、ピットと切り合っている可能性もある。遺物は土器細片1点のみで、図示できるものはなかった。

SK24（図15）

2区C15グリッドに位置し、西側をSD13に切られる。方形プランを呈し、長軸112cm、短軸72cmを測る。埋土は暗灰褐色粘質シルトである。遺物は土器が10点出土したが、図示できるものはなかった。

SK25（図16）

2区C16グリッドに位置し、SK22を切る。南北方向に長い溝状を呈し、長さ300cm、幅36cm、深さ4cmを測る。埋土は暗灰色粘質シルトである。遺物は全く出土しなかった。

SK26（図15）

2区D17グリッドに位置し、北側は撹乱に破壊される。不整形プランを呈し、長軸172cm、短軸135cm、深さ15cmを測る。埋土は暗褐色粘質シルトである。遺物は土器が7点出土したが、図示できるものはなかった。

SK28（図16）

2区E17グリッドに位置し、北側を撹乱に破壊される。南北方向に長い溝状を呈し、残存部分での長さ226cm、幅53cm、深さ15cmを測る。埋土は黒褐色粘質シルトである。遺物は土器細片が2点出土したが、図示できるものはなかった。

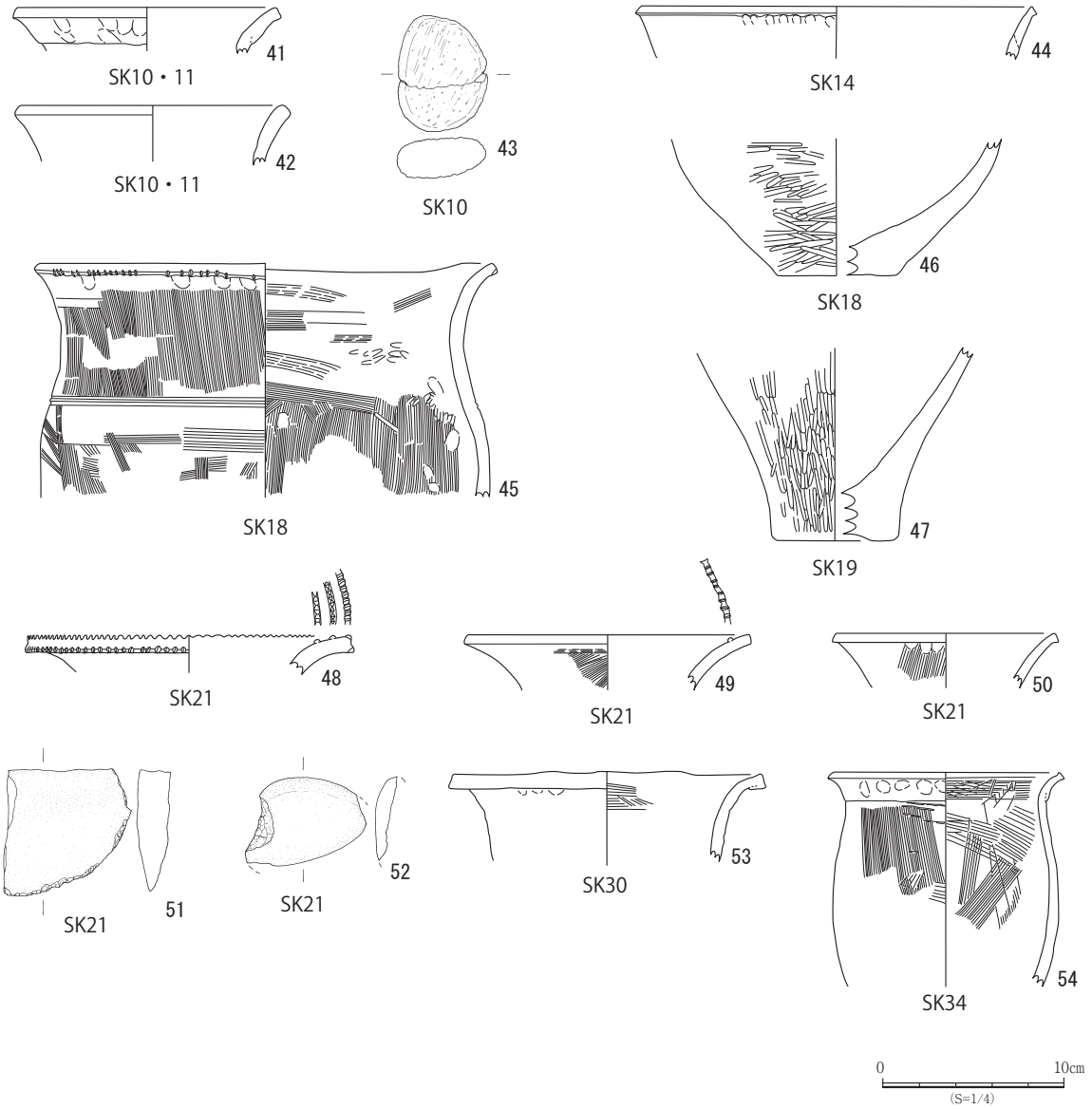


図 17　SK10・11・14・18・19・21・30・34 出土遺物実測図

SK29（図 16）

2 区 C16 グリッドに位置する。方形プランを呈し、長軸 104cm、短軸 102cm、深さ 7cmを測る。埋土は暗褐色粘質シルトである。遺物は土器が 23 点出土したが、図示できるものはなかった。

SK30（図 16・17）

2 区 C20 グリッドに位置する。楕円形プランを呈し、長軸 154cm、短軸 102cm、深さ 10cmを測る。埋土は黒褐色粘質シルトである。遺物は土器が 47 点出土し、弥生土器 1 点を図示した。53 は甕で、胎土に砂粒を非常に多く含み、口唇部は面取りされている。

SK32（図 16）

2 区 B19 グリッドに位置し、ST4 に切られる。円形プランを呈し、直径 116cm、深さ 15cmを測る。埋土は黒色粘質シルトである。遺物は土器が 15 点出土したが、図示できるものはなかった。

SK33（図 16）

2 区 C19 グリッドに位置し、SK32 に隣接する。両端を近現代のピットに切られる。楕円形プランを呈し、残存長 62cm、幅 36cm、深さ 16cmを測る。埋土は暗褐色粘質シルトである。遺物は土器が 5 点出土したが、図示できるものはなかった。

SK34（図 16・17）

2 区 C18 グリッドに位置する。楕円形プランを呈し、長軸 85cm、短軸 50cm、深さ 11cmを測る。埋土は暗褐色砂質シルトである。遺物は土器が 44 点出土し、弥生土器 1 点を図示した。54 は貼付口縁の甕上半部で、胴部は内外面ともに板状工具でナデ調整が施される。

（3）溝状遺構

SD1 ～ 3（図 19）

SD1 は B6 ～ C6 グリッドに位置し、SD2・3 は B7 ～ C7 グリッドに位置する。3 本とも並行して南北方向に直線的に延びており、埋土も同じであることから一連の遺構と考えられる。いずれも調査区の基本層序Ⅳ層上面から掘り込まれている。断面観察から SD1 は 2 回以上掘り直しが行われていることが分かる。SD1 は幅 94 ～ 157cm、深さ 75cm、SD2 は幅 86 ～ 115cm、深さ 15cm、SD3 は幅 40 ～ 50cm、深さ 8cmを測る。SD2 と SD3 の間は幅 1.55 ～ 1.80m ほどの空間があり、道路状遺構の可能性がある。遺物はほとんど出土せず、図示できたのは 1 点である。72 は SD2 から出土した播磨型羽釜の口縁部である。

SD4 ～ 8（図 20）

SD4 ～ 6 は B9 ～ B10 グリッドに位置し、SD7・8 は C9 ～ C10 グリッドに位置する。5 本とも東西方向に並行する溝状遺構である。いずれも非常に浅く、長さも 1.8 ～ 4.5m ほどで端部は明瞭

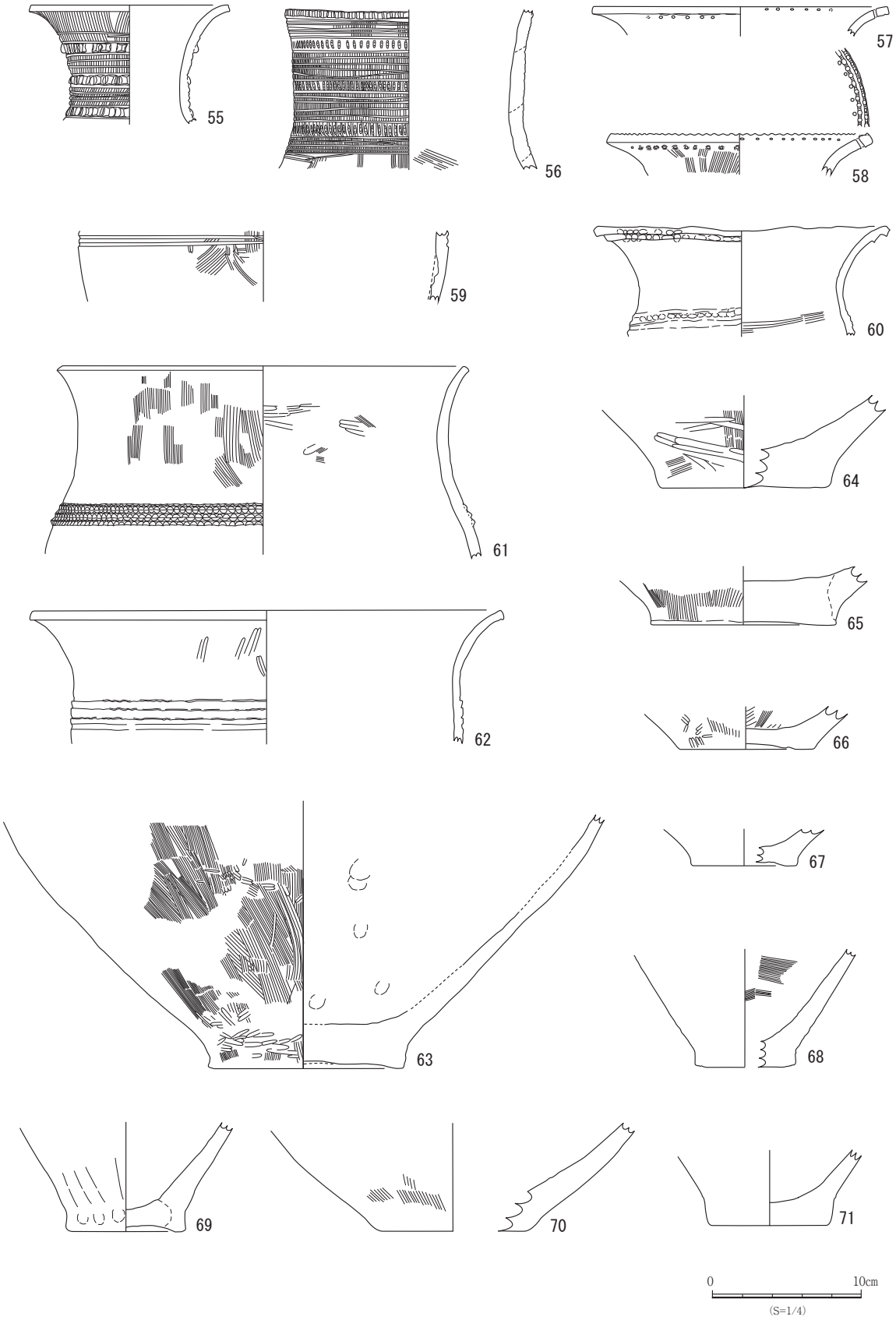


図 18　SK22 出土遺物実測図

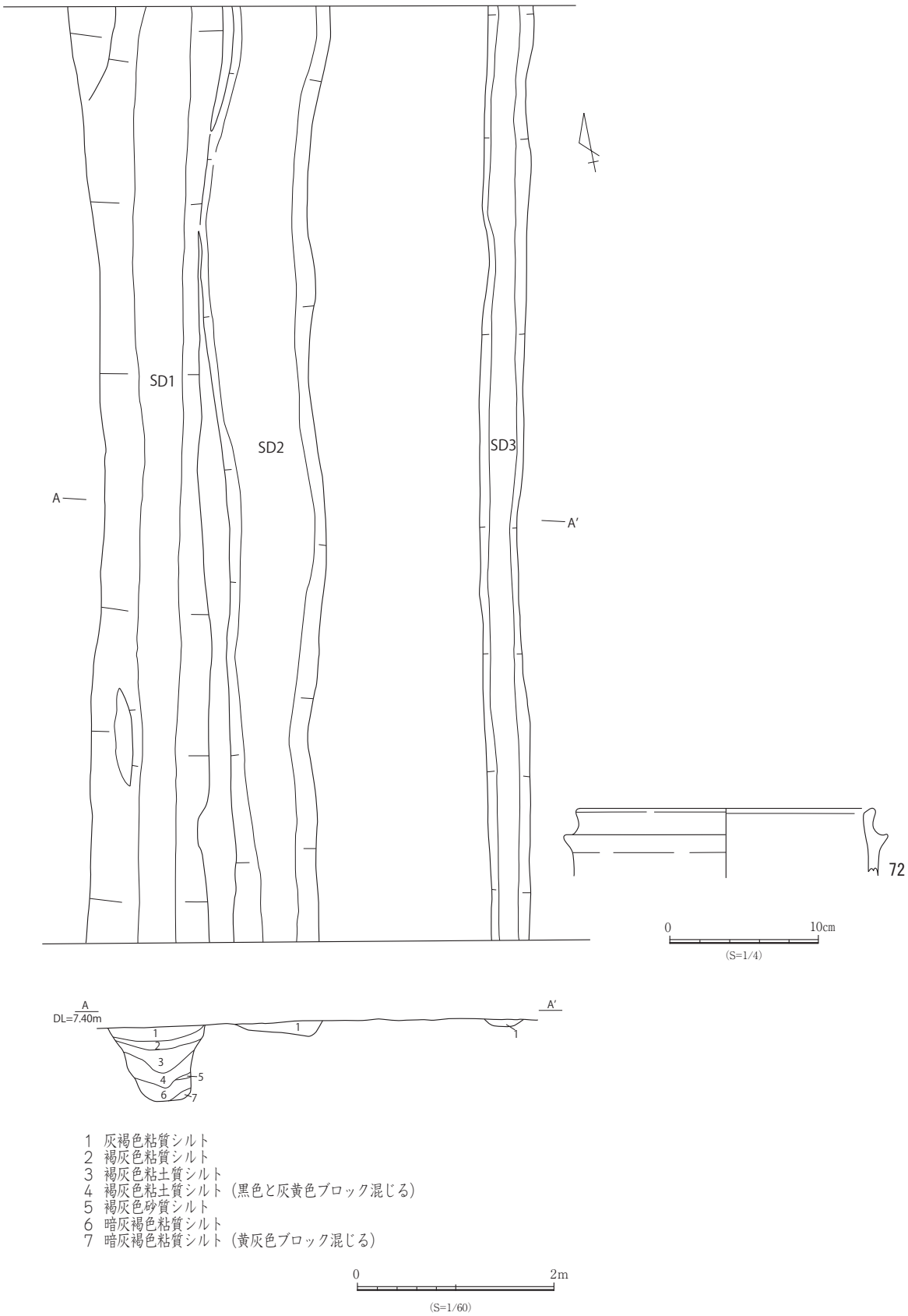


図 19　SD1 ～ 3 遺構図及び SD2 出土遺物実測図

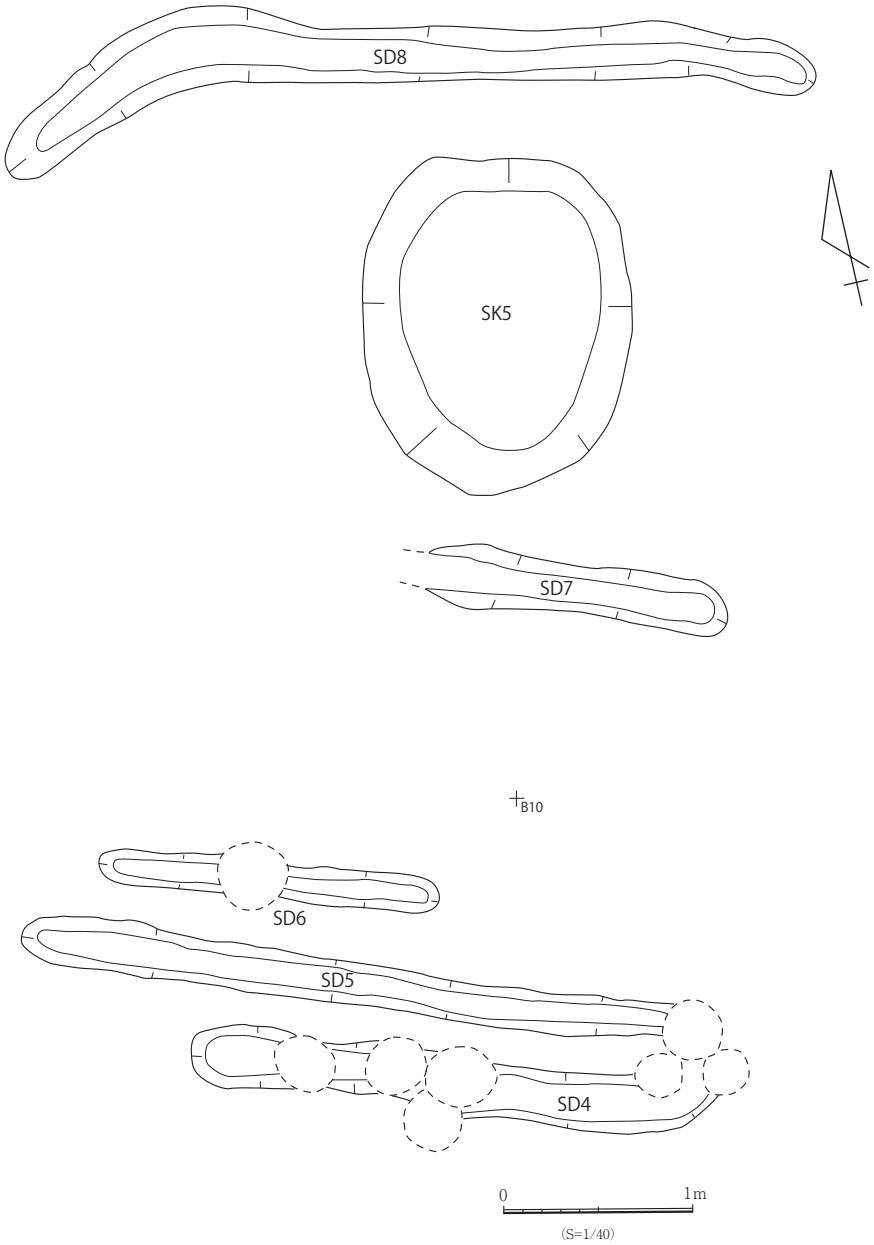


図 20　SD4 ～ 8 遺構図

な掘り方が確認できなかった。埋土はすべて暗灰褐色粘質シルトである。SK5を囲むように溝が配置されている可能性もある。遺物はSD8で土器細片が3点出土したのみで、ほとんど遺物を含んでいないため、時期も不明である。

SD9～11（図21～23）

A7～D7グリッドに位置し、SD10がSD9を切る。SD9とSD10は等高線に沿って南北方向に弧状に延び、調査区中央で交差する。SD10は北側の拡張区でも一部が検出され、北西に向かって延びていることが確認された。SD11はSD10に直行する浅い溝で、調査区南壁の手前で途切れる。切り合い関係は不明で、同時併存していた可能性もある。

SD9の遺物（図22）は比較的北側に集中して出土した。73～77・79～81・85～92・95～99はSD9埋土からの出土であるが、78・82～84・93・94は切り合い部分のサブトレンチからの出土で、どちらに属するかは不明である。

73～86・88は壷である。73・74は長頸壷であり、73は摩耗が著しく不明瞭ではあるが細い2条の沈線を太い沈線で上下に挟んだ4条を1単位とする6単位の沈線帯が施される。口唇部外面には、円形浮文が貼付される。74は頸部に3条の微隆起帯を巡らせ、肩部には円形浮文と沈線が施される。75は口縁部が大きく外反し、口唇部に浅い刻目が施される。肩部にはヘラ描沈線の上に浮文が貼付される。76は口縁部が大きく外反し、口唇部に刻目が施される。外面は強いハケ調整である。77は口唇部を面取りし下部に断面三角形の微隆起帯が貼付される。78・79は面取りした口唇部の上下に刻目を施し、内面から穿孔した小穴が並ぶ。84は口唇部をやや拡張し、端部はにぶい凹線状となる。86は貼付口縁の粘土帯が剥離しており、接合面に指頭圧痕がみられる。

89は甕の口縁部で、く字状に屈曲した口縁の端部がやや拡張される。

87・90は高坏の口縁部である。87は坏部の屈曲部分で割れており、外面に6条の凹線文が施される。90は短く立ち上がった口縁端部に面を持たせて凹線文を入れ、外面にも2条の凹線文が施される。91は高坏もしくは鉢の口縁部である。外面はハケ、内面はハケの後にミガキで丁寧に仕上げられている。92は器種が不明であるが、端部内面に断面三角形の粘土帯を貼付し、平坦面を作っているため高坏などの脚部の可能性がある。93～95は底部片である。93は底面は平らであるが、底部円盤が高台状に張り出す。96は磨製石斧の刃部片である。片刃で両面に擦痕が残る。

97・98は打製石包丁である。円礫を打ち欠いて作られており、両側縁にはわずかに抉りが入れられる。99は磨製石庖丁である。左紐孔部から左側縁にかけて欠損している。紐孔部には使用による摩耗がみられる。欠損部にも同様の摩耗が見られ、欠損後も使用されていたと考えられる。砂岩製で、片刃である。

SD10の遺物（図23）は中央の屈曲部分に集中して出土した。

100～106は壷である。100・105・106は貼付口縁の端部をやや拡張させ面取りがされる。101は肩部に微隆起帯を貼付し、その下に縦方向の短いS字状文が施される。102は櫛描沈線文上に浮文が貼付される。103は屈曲して水平近く開いた口縁端部を上方に拡張して2条の凹線文が施される。104は上方に拡張した口縁端部に凹線文が2条施され、内面には斜格子文が施される。

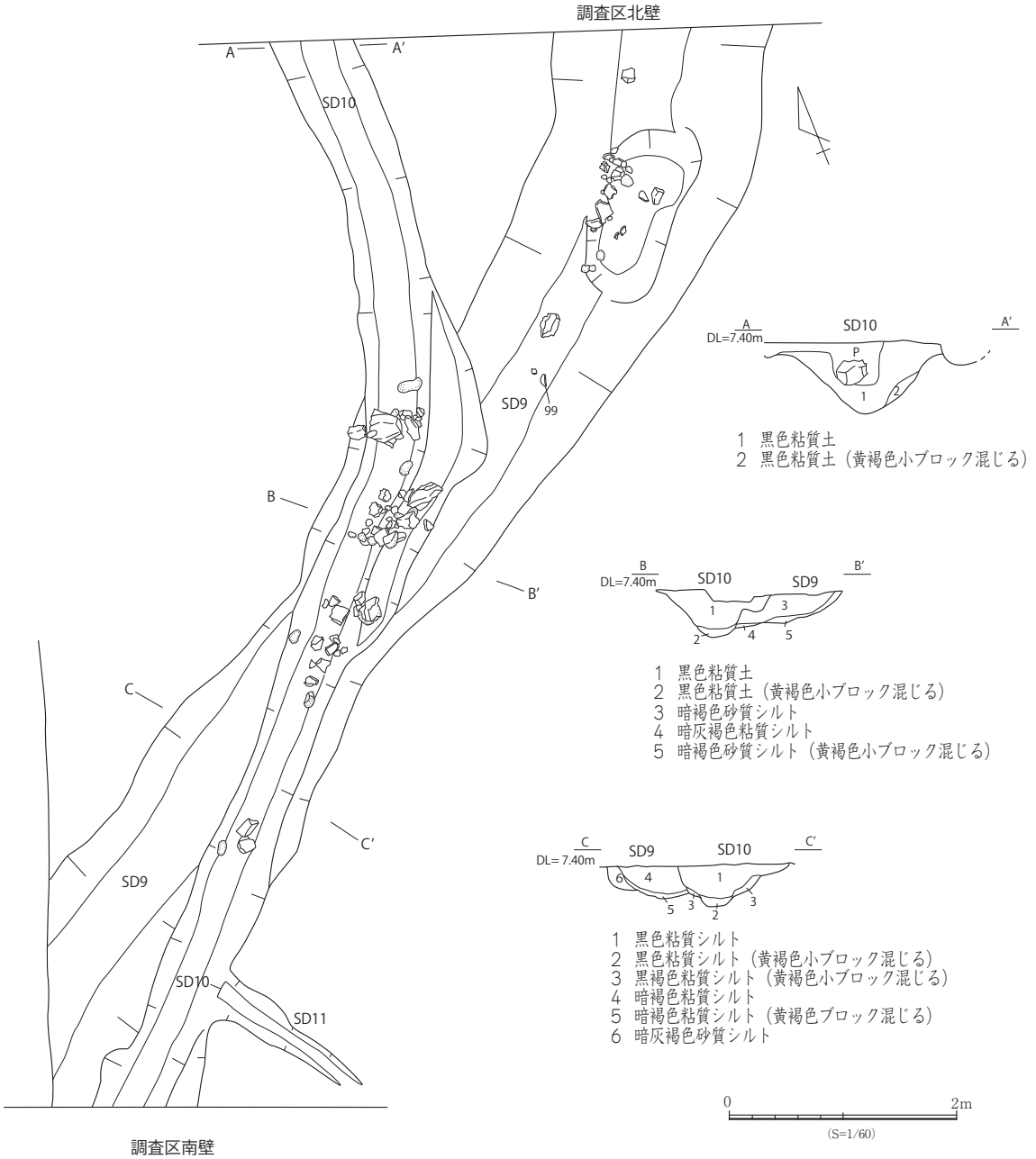


図 21　SD9 ～ 11 遺構図

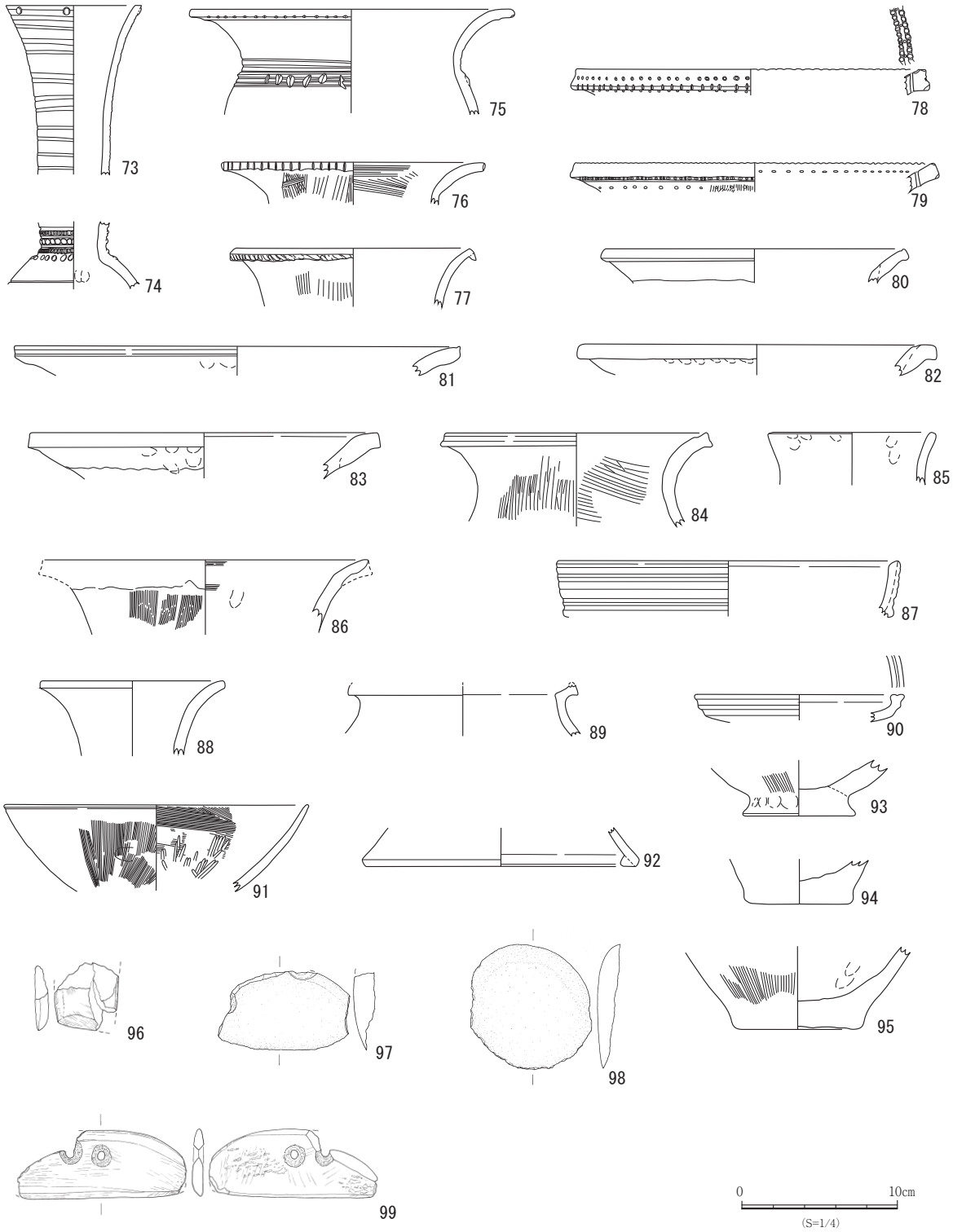


図 22　SD9・10 出土遺物実測図

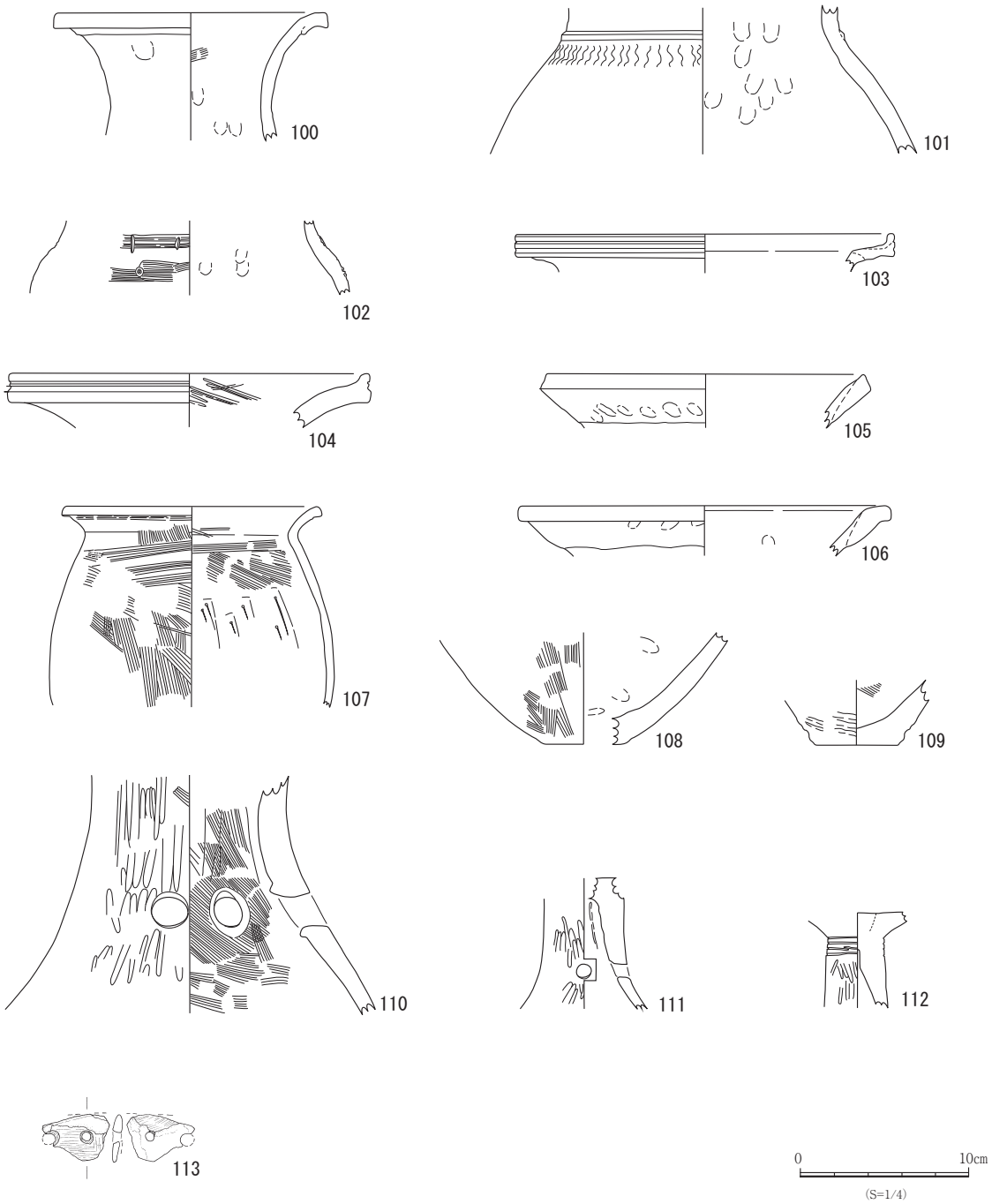


図 23　SD10 出土遺物実測図

107 は甕である。く字状に屈曲した口縁部で、端部は面取りされる。内外面ともに口縁部はナデ、肩部はハケで調整される。内面下半はケズリが用いられる。焼成も良好で、丁寧なつくりである。

108・109 は底部である。109 は外面にタタキが残る。

110 は器台である。外面は縦方向のミガキで丁寧に仕上げられる。円形の透かしは残存部分の位置から 3 方向に入れられていたと考えられる。内面は上部に絞り痕が残り、下部はハケ調整である。上部の破面は粘土帯の接合面である。

111・112 は高坏の脚部である。111 は円形透かしが入れられ、外面ミガキで丁寧に仕上げられる。上部は坏部との接合面で割れている。112 は脚部の上端部に沈線が 4 条施される。坏部側から粘土塊が充填される。

113 は磨製石包丁である。紐孔部しか残存していないが、2 ヵ所の穿孔が観察できる。泥質片岩製である。

SD12 ～ 14（図 24）

2 区 A14 ～ D15 グリッドに位置する。SD1 ～ 3 と同じように南北に並行して延びる溝である。溝の方向や溝同士の距離関係も酷似しており、関係性が推測できる。SD12 は幅 110 ～ 120㎝、深さ 26㎝、SD13 は幅 60 ～ 68㎝、深さ 16㎝、SD14 は幅 40 ～ 60㎝、深さ 7㎝を測る。SD13 と SD14 の間は 188 ～ 212㎝の空間がある。いずれの遺構からも遺物は出土していないため、時期は不明である。

（4）掘立柱建物跡

SB1（図 25）

1 区 C8 グリッドに位置する。桁行 3 間、梁行 2 間の総柱建物跡である。棟方向は N-15°-E である。桁行 5.3m、梁行 3.4mで、柱間寸法は桁行 1.4 ～ 2.2m、梁行 1.7mである。柱穴平面形は円形で、直径 15 ～ 36㎝である。埋土は暗灰褐色土である。南東隅の部分には撹乱があり、柱穴を検出することはできなかった。

SB2（図 26）

1 区 C9 グリッドに位置する。桁行 4 間、梁行 2 間の総柱建物跡である。棟方向は N-78°-W である。桁行 8.2m、梁行 3.7mで、柱間寸法は桁行 1.6 ～ 2.6m、梁行 1.6 ～ 2.1m である。柱穴平面形は円形で、直径 24 ～ 40㎝である。埋土は暗灰褐色土である。

SB3（図 27）

1 区 D9 グリッドに位置する。桁行 4 間、梁行 1 間以上の掘立柱建物跡である。北側は調査区外である。棟方向は N-82°-Wである。桁行 7.3m、梁行 1.3m 以上で、柱間寸法は桁行 1.5 ～ 2.2m、梁行 1.3m である。柱穴平面形は円形で、直径 22 ～ 35㎝である。埋土は暗灰褐色土である。

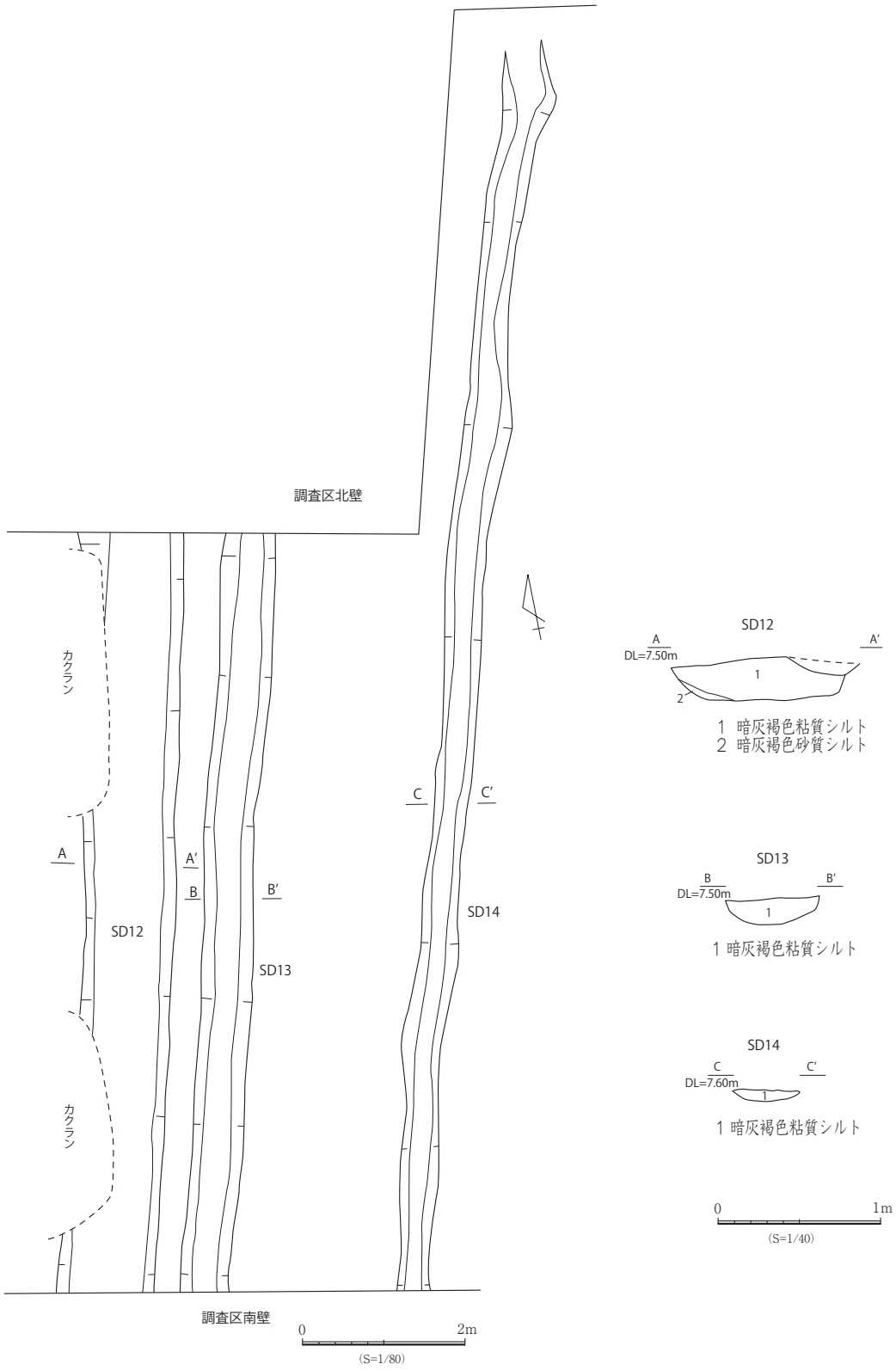


図 24　SD12 ～ 14 遺構図

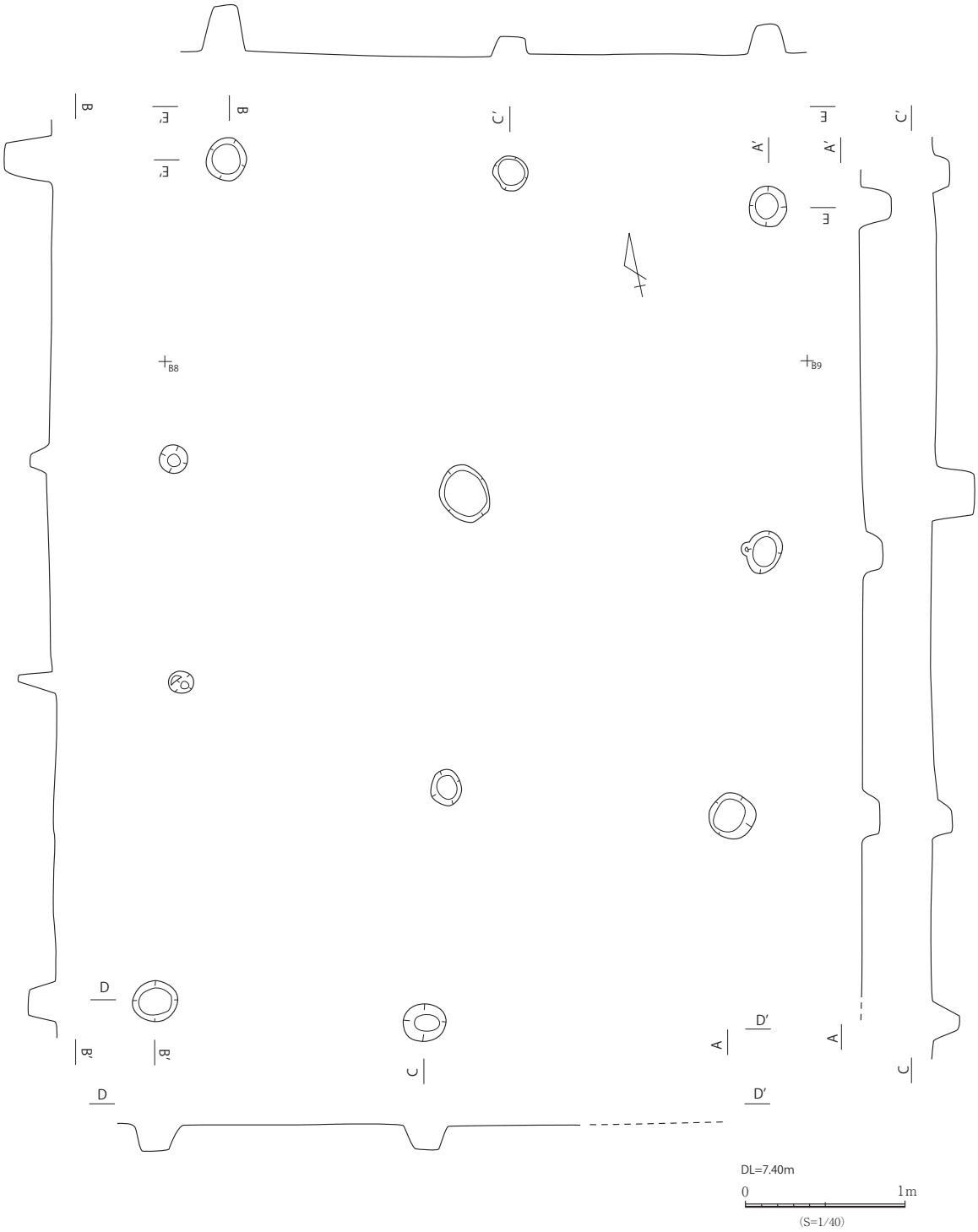


図 25　SB1 遺構図

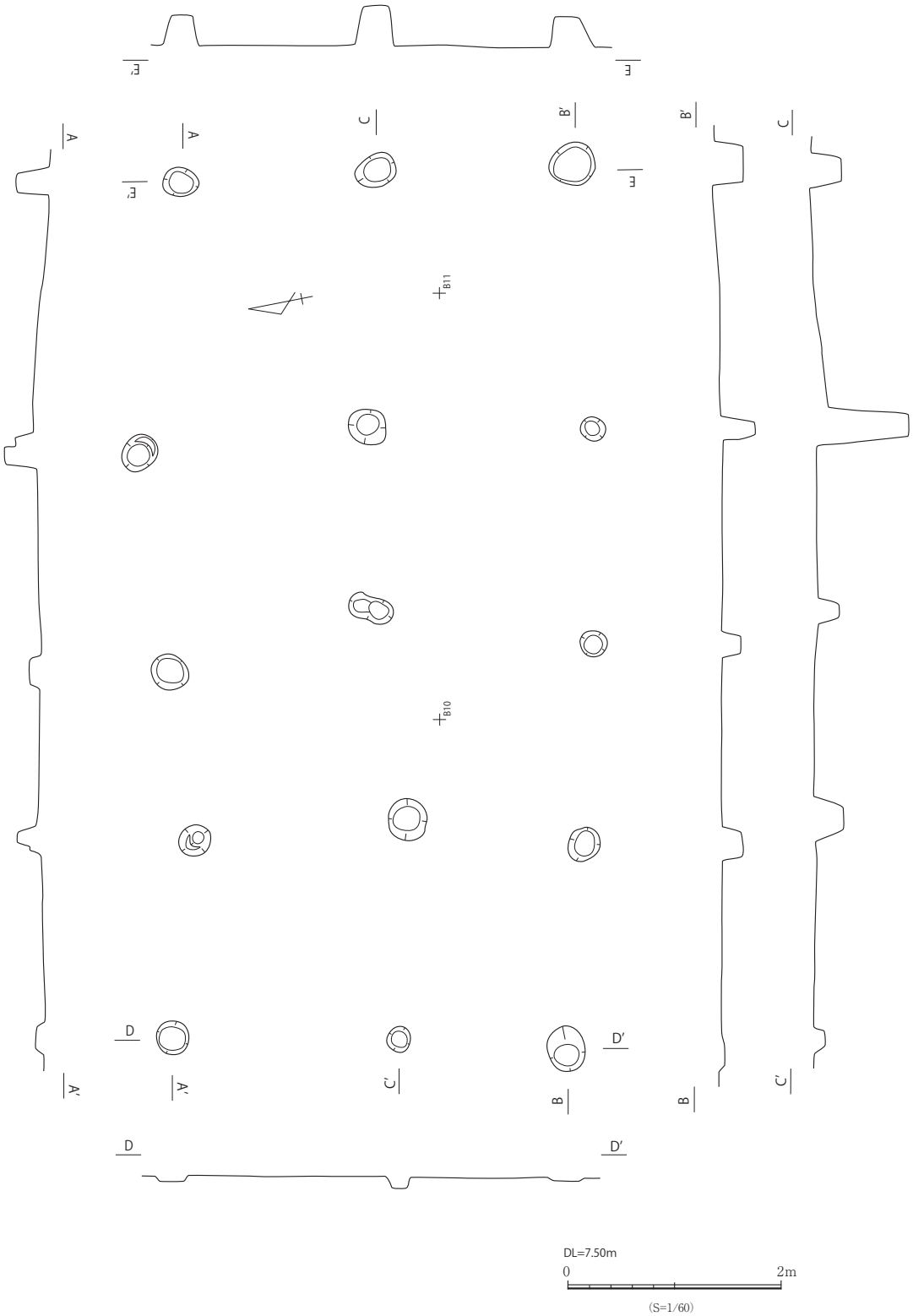


図 26　SB2 遺構図

（5）その他の遺構・遺物

ピット列（図 28）

3 区 E4 グリッドでやや弧状に並んだピット列が検出された。

各ピットは平面形から 2 つのピットが切り合っているように見えるが、切り合いは不明である。埋土はいずれもしまりのない黒色粘土で、深さは約 8cmである。北側の列は 5 つのピットが並んでおり、全長 2.9m である。南側の列は 2 つのピットが検出でき、調査区西側へ続くようである。柱間距離は約 55 ～ 70 cmと短く、弧状に配置することから建物跡とは考えにくい。1 区南側でも類似するピットの並びが確認できる。『西野々遺跡Ⅲ』のⅧ区では直線的な並びで柱間 70cmほどのピット列を塀・柵列跡として報告されている。『田村西遺跡』では 1 ヵ所に集中するようにピット列が見つかっており、性格不明遺構として報告されている。

ピット出土遺物（図 29 － 114 ～ 127）

114・115 は P8 出土の土師質土器坏である。114 は底面が回転糸切で、内面にロクロ目が顕著に残る。116 は P22 出土の弥生土器甕口縁部である。117 は P54 出土の弥生土器壷胴部である。頸部と体部の境に粘土帯を貼付し、斜格子文が施される。118 は P73 出土の弥生土器底部である。凹底状を呈する。119 は P77 出土の弥生土器壷である。口唇部がほとんど残存していないため明確ではないが、刻目が施される。頸部と体部の境には櫛描文が施される。胴部外面と頸部内面は細かいハケ調整が施される。120 は P95 出土の弥生土器底部である。外面に縦方向の強いナデ調整が施され、焼成は良好である。121 は P123 出土の弥生土器底部である。122 は P129 出土の弥生土

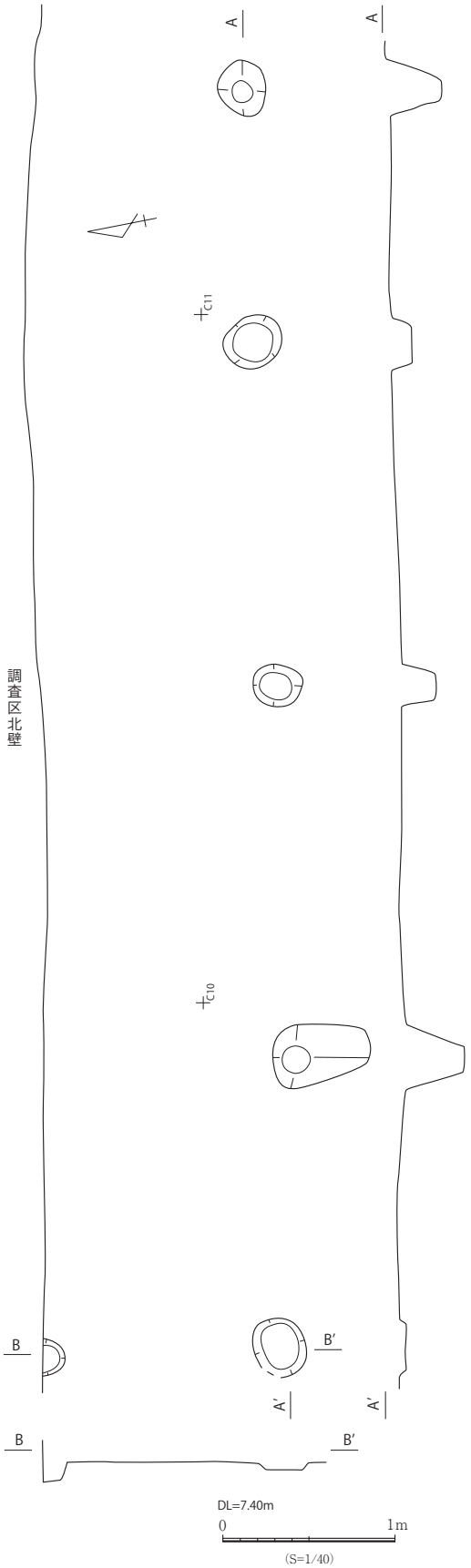


図 27　SB3 遺構図

器壷口縁部である。口縁端部を肥厚させて刻目が施され、その下部に 4 条の沈線が巡る。123 は P150 出土の小型土器の脚である。破面は坏部との接合面である。124 は P181 出土の弥生土器壷口縁部である。内外面ともに強いハケ調整が施される。125 は P7 出土の磨製石斧である。基部は欠損しているが、片刃で非常に丁寧な作りであり、稜線も明瞭である。石材は黒色の蛇紋岩である。126 は P51 出土の砂岩製の敲石である。両端にツブレがみられる。127 は P89 出土の両端が打ち欠かれた砂岩円礫である。法量は長さ 28.5cm、幅 14.5cm、厚さ 8.2cm、重さ 5,400g である。打ち欠き部分は両極剥離により幅 8cm程度の剥片が複数とられた痕跡が認められるため、打製石包丁の素材と考えられる。また、ピット底面に横たえて置かれた出土状況から埋納遺構の可能性がある。

包含層出土遺物（図 29 － 128 ～ 137）

128 は弥生土器甕口縁部である。口縁端部を肥厚させて、浅い刻目を施す。129 は弥生土器底部である。130 は土師質土器坏である。底面は回転糸切で、内面下部にはロクロ目が顕著に残る。131 ～ 133 は弥生土器甕口縁部である。131 は外面タタキ調整が施される。132・133 は貼付口縁である。134 は弥生土器壷口縁部で、口唇部に円形浮文が貼付される。黒色を呈し、白色砂粒を多量に含む。135 は弥生土器の脚部で、鋸歯文が施される。136 は弥生土器の底部で、胎土に角閃石を含む。讃岐系の搬入土器と考えられる。137 は青花碗である。

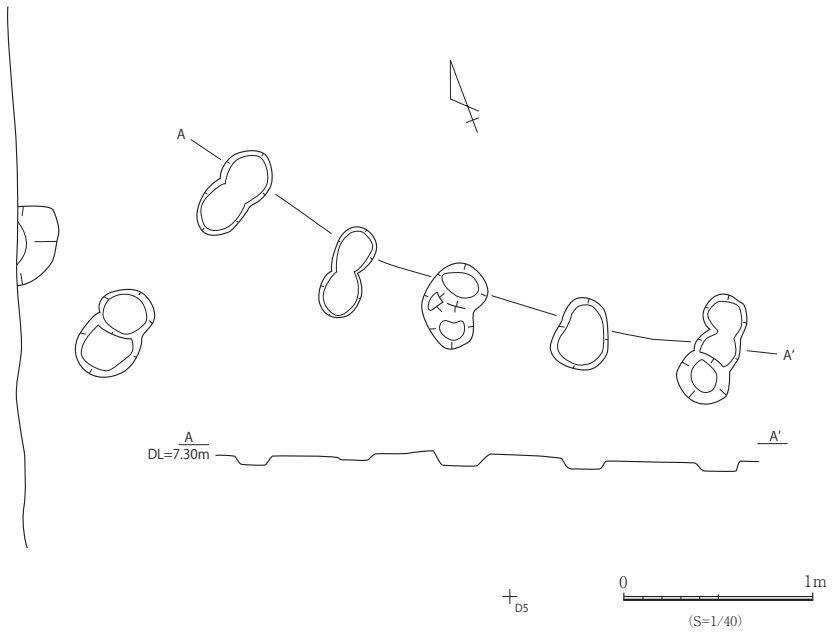


図 28　ピット列遺構図

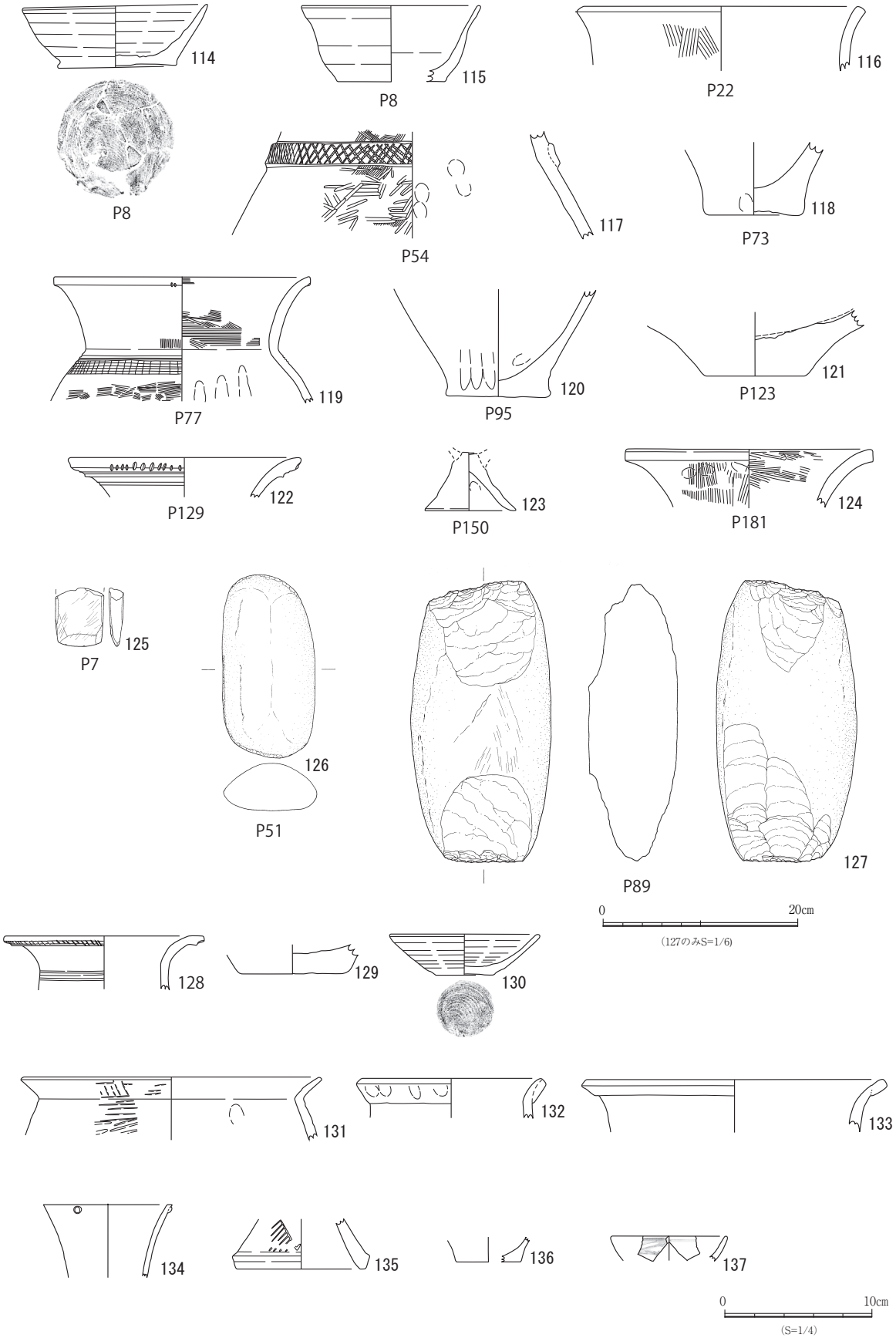


図 29　ピット・包含層出土遺物実測図

表 1 出土土器・土製品観察表

図面番号	遺物番号	遺構名等	種別	器種 部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	特徴・調整	胎土
図 4	1	試掘 TP2	弥生土器	壷 口縁部	(12.0)	(6.8)		全面磨滅	砂粒やや多い
図 4	2	試掘 TP2	弥生土器	鉢	(11.9)	6.5	3.4	全面磨滅	砂粒やや多い
図 4	3	試掘 TP2P3	弥生土器	底部		(4.6)		外面ナデ、内面ハケ	砂粒やや多い
図 8	4	ST1	弥生土器	壷 胴部		(5.7)		外面沈線 4 条、波状文 4 条、内面ナデ	砂粒少量
図 8	5	ST1 検出面	弥生土器	底部		(5.5)	2.9	外面タタキ後ナデ、内面ナデ	砂粒少量
図 8	6	ST1 検出面	土師質土器	底部		(1.3)	4.2	内面ロクロ痕、底部回転糸切	緻密
図 9	10	ST3	弥生土器	高坏		(3.9)		内外面ナデ	砂粒やや少ない
図 9	11	ST3	弥生土器	底部		(3.2)	(5.4)	平底、外面ハケ、内面ナデ	砂粒やや多い
図 10	13	ST4P4	弥生土器	壷	22.3	32.8		完形、口唇部斜格子刻み、外面タタキ後ハケ、ミガキ、内面ナデ、ハケ、指頭圧痕、底部丸底	砂粒やや多い
図 10	14	ST4P4	弥生土器	壷 口縁部	(26.0)	(1.8)		口唇部刻み、内面刻目突帯 3 条、穿孔	砂粒やや多い
図 10	15	ST4P10	弥生土器	壷 口縁部	(24.6)	(1.8)		口唇部指頭圧痕	砂粒やや多い
図 10	16	ST4 上層	弥生土器	壷 口縁部	(16.0)	(3.0)		貼付口縁	砂粒非常に多い
図 10	17	ST4P6	弥生土器	壷 胴部		(11.9)		外面ハケ後上半部ミガキ、内面ハケ	砂粒少量
図 11	18	ST4 床面	弥生土器	甕	16.4	28.3		ほぼ完形、丸底、外面タタキ、内面口縁丁寧なハケ、ナデ、胴部強いナデ	砂粒やや少ない
図 11	19	ST4	弥生土器	甕 口縁部	(16.8)	(8.4)		外面口縁タタキ、ミガキ、胴部タタキ、内面口縁ハケ、胴部ナデ	砂粒やや多い
図 11	20	ST4	弥生土器	甕 口縁部	15.5	(8.0)		外面タタキ、内面口縁丁寧なハケ、胴部ナデ	砂粒やや多い
図 11	21	ST4	弥生土器	甕 口縁部	(16.4)	(7.3)		外面タタキ、内面ハケ、ナデ	砂粒やや多い
図 11	22	ST4 下層	弥生土器	甕 口縁部	(15.4)	(5.0)		外面タタキ、内面ハケ、ナデ	砂粒やや多い
図 11	23	ST4	弥生土器	甕 口縁部	(16.1)	(6.3)		外面タタキ、ナデ、内面ナデ	大粒砂粒多い
図 11	24	ST4 下層	弥生土器	甕 口縁部	(16.4)	(8.0)		外面タタキ、ハケ、内面口縁ハケ、胴部ナデ	砂粒やや多い
図 11	25	ST4 床面	弥生土器	甕 口縁部	(13.0)	(5.6)		外面タタキ、内面ナデ	砂粒多い
図 11	26	ST4	弥生土器	壷 底部		(5.7)	(5.8)	外面ミガキ、底面ミガキ、内面ハケ	砂粒やや多い
図 11	27	ST4 床面	弥生土器	鉢 底部		(5.7)		外面タタキ、内面ナデ	砂粒やや多い
図 11	28	ST4 上層	弥生土器	鉢	(23.4)	(8.0)		外面タタキ後ナデ、内面ナデ	砂粒少ない
図 11	29	ST4	弥生土器	鉢	(12.7)	(4.2)		外面タタキ、内面ナデ	砂粒やや多い
図 11	30	ST4 上層	弥生土器	鉢	(12.8)	6.5	(3.5)	外面ナデ、内面ナデ、内面上半部は板状工具によるナデ	砂粒少ない
図 11	31	ST4 床面	弥生土器	支脚		(9.5)		内外面ナデ、指頭圧痕	砂粒やや少ない
図 11	32	ST4	弥生土器	小型土器 脚部		(3.3)		外面ナデ、指頭圧痕、接合部粘土塊充填	砂粒少ない
図 11	33	ST4 上層	弥生土器	高坏 脚部		(5.2)		沈線 6 条、内面絞り痕	砂粒少ない
図 11	34	ST4 下層	弥生土器	支脚		(5.0)	(7.5)	内外面ナデ、指頭圧痕	砂粒やや少ない
図 11	35	ST4 下層	弥生土器	支脚		(3.2)	(6.7)	内外面ナデ、指頭圧痕	砂粒やや少ない
図 11	36	ST4 床面	弥生土器	手づくね土器	(5.0)	2.7	1.5	内外面ナデ、指頭圧痕	砂粒少ない
図 12	37	ST5	弥生土器	甕 口縁部	(16.6)	(8.0)		外面タタキ、内面ハケ、ナデ、指頭圧痕	砂粒やや多い
図 12	38	ST5	弥生土器	甕 口縁部	(14.0)	(3.9)		外面タタキ、内面ハケ、ナデ	砂粒少ない
図 12	39	ST5	弥生土器	甕 底部		(3.4)	2.0	外面タタキ、ナデ、内面ナデ	砂粒多い
図 12	40	ST5	土師質土器	釜 取手		(4.8)		ナデ、直径 9mm の穿孔	緻密

図面番号	遺物番号	遺構名等	種別	器種 部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	特徴・調整	胎土
図 17	41	SK10・11	弥生土器	甕 口縁部	(14.4)	(2.5)		貼付口縁、外面ナデ、指頭圧痕、内面ナデ	砂粒多い
図 17	42	SK10・11	弥生土器	甕 口縁部	(14.0)	(3.0)		磨滅	砂粒非常に多い
図 17	44	SK14	弥生土器	甕 口縁部	(21.6)	(2.9)		口唇部肥厚、外面ナデ、指頭圧痕、内面ナデ	砂粒多い
図 17	45	SK18	弥生土器	甕	25.4	(13.0)		口唇部刻み、肩部沈線 2 条、内外面ハケ、ナデ	大粒砂粒多い
図 17	46	SK18	弥生土器	壷 底部		(7.6)	(6.5)	外面ミガキ、内面ナデ	大粒砂粒多い
図 17	47	SK19	弥生土器	底部		(10.7)	(6.6)	外面ミガキ、内面ナデ	砂粒非常に多い
図 17	48	SK21	弥生土器	壷 口縁部	(18.0)	(2.2)		口唇部上下刻目、内面刻目突帯 2 条	砂粒多い
図 17	49	SK21	弥生土器	壷 口縁部	(15.8)	(3.1)		刻目突帯 1 条、外面ハケ、内面ナデ	砂粒やや多い
図 17	50	SK21	弥生土器	壷 口縁部	(12.2)	(3.0)		口唇部肥厚、外面ハケ、ナデ、内面ナデ	砂粒やや多い
図 17	53	SK30	弥生土器	甕 口縁部	(17.1)	(5.0)		外面ナデ、指頭圧痕、内面ハケ	砂粒非常に多い
図 17	54	SK34	弥生土器	甕	12.6	(12.0)		貼付口縁、口縁部外面ナデ、指頭圧痕、内面ナデ、胴部内外面板状工具によるナデ、ハケ	砂粒やや少ない
図 18	55	SK22	弥生土器	壷 口縁部	(13.4)	(8.0)		外面ハケ後、頸部に多条沈線、刻目突帯 3 条、内面ナデ	砂粒やや少ない
図 18	56	SK22	弥生土器	壷 頸部		(10.8)		外面ハケ後、刻目突帯 1 条、刻目 3 条、多条沈線、内面ナデ、ハケ	砂粒やや少ない
図 18	57	SK22	弥生土器	壷 口縁部	(20.0)	(2.0)		口唇部穿孔、内外面ナデ	大粒砂粒含多い
図 18	58	SK22	弥生土器	壷 口縁部	(17.4)	(2.8)		口唇部穿孔、内面刻目突帯 2 条、外面ハケ、内面ナデ	砂粒やや多い
図 18	59	SK22	弥生土器	壷 胴部		(4.7)		沈線 2 条、重弧文、外面ミガキ、内面剝離	砂粒少ない
図 18	60	SK22	弥生土器	甕 口縁部	(19.6)	(7.4)		口唇部突帯 2 条、胴部突帯 2 条、内外面ナデ	大粒砂粒多い
図 18	61	SK22	弥生土器	甕 口縁部	(27.2)	(13.0)		突帯 3 条、外面ハケ、内面ミガキ	大粒砂粒非常に多い
図 18	62	SK22	弥生土器	甕 口縁部	(31.6)	(9.0)		口唇部面取り、胴部突帯 3 条、外面ミガキ、内面ナデ	砂粒やや少ない
図 18	63	SK22	弥生土器	底部		(18.2)	13.2	外面ハケ、一部ミガキ、内面ナデ、底面丁寧なナデ、ミガキ	砂粒やや多い
図 18	64	SK22	弥生土器	底部		(6.3)	(11.2)	外面ハケ後ミガキ、内面ナデ、底面ナデ	砂粒やや多い
図 18	65	SK22	弥生土器	底部		(4.0)	(12.6)	外面ハケ、内面ナデ、底面ナデ	砂粒やや多い
図 18	66	SK22	弥生土器	底部		(2.9)	(9.1)	外面ハケ、ミガキ、内面ハケ、底面ナデ	砂粒やや多い
図 18	67	SK22	弥生土器	底部		(2.5)	(7.1)	高台状、内外面ナデ、底面ナデ	砂粒やや少ない
図 18	68	SK22	弥生土器	底部		(8.0)	(6.8)	外面ハケ、ナデ、底面ナデ、内面板状工具によるナデ	大粒砂粒多い
図 18	69	SK22	弥生土器	底部		(7.4)	(8.0)	高台状、外面板状工具によるナデ、内面、底面ナデ	砂粒やや多い
図 18	70	SK22	弥生土器	底部		(7.3)	(10.1)	外面ハケ、内面ナデ	砂粒やや少ない
図 18	71	SK22	弥生土器	底部		(5.1)	8.1	平底、内外面ナデ、底面ナデ	大粒砂粒非常に多い
図 19	72	SD2	土師質土器	羽釜 口縁部	(20.0)	(4.6)		内外面ナデ	緻密
図 22	73	SD9	弥生土器	壷 口縁部	(8.8)	(11.0)		口唇部円形浮文貼付、4 条の沈線帯を 6 単位施文、内面ナデ	砂粒やや多い
図 22	74	SD9	弥生土器	壷 胴部		(4.4)		頸部微隆起帯 3 条、肩部円形浮文、沈線、内面ナデ	砂粒少ない
図 22	75	SD9	弥生土器	壷 口縁部	(20.8)	(6.8)		口唇部刻目、凹線 2 条、肩部凹線 2 条、浮文貼付、内面ナデ	砂粒やや多い
図 22	76	SD9	弥生土器	壷 口縁部	(17.0)	(2.7)		口唇部刻目、内外面ハケ	砂粒やや少ない
図 22	77	SD9	弥生土器	壷 口縁部	(14.8)	(3.8)		口唇部面取り、微隆起帯貼付、内外面ナデ	砂粒非常に少ない

図面番号	遺物番号	遺構名等	種別	器種 部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	特徴・調整	胎土
図 22	78	SD9・10	弥生土器	壷 口縁部	(22.5)	(1.7)		口唇部上下に刻目、刺突文、内面刻目突帯2条、穿孔	砂粒少ない
図 22	79	SD9	弥生土器	壷 口縁部	(23.3)	(1.9)		口唇部上下に刻目、穿孔	砂粒少ない
図 22	80	SD9	弥生土器	壷 口縁部	(19.3)	(2.2)		貼付口縁、内外面ナデ	砂粒少ない
図 22	81	SD9	弥生土器	壷 口縁部	(29.0)	(1.9)		内外面ナデ	砂粒非常に少ない
図 22	82	SD9・10	弥生土器	壷 口縁部	(22.8)	(2.0)		貼付口縁、外面ナデ、指頭圧痕、内面ナデ	砂粒やや少ない
図 22	83	SD9・10	弥生土器	壷 口縁部	(22.5)	(3.0)		外面ナデ、指頭圧痕、内面ナデ	砂粒やや少ない
図 22	84	SD9・10	弥生土器	壷 口縁部	(16.9)	(6.1)		内外面ハケ、ナデ	砂粒少ない
図 22	85	SD9	弥生土器	壷 口縁部	(10.9)	(3.4)		内外面ナデ、指頭圧痕	砂粒非常に少ない
図 22	86	SD9	弥生土器	壷 口縁部	(21.5)	(4.7)		口唇部貼付口縁剥離、外面指頭圧痕、ハケ、内面ナデ	砂粒少ない
図 22	87	SD9	弥生土器	高坏 口縁部	(22.0)	(3.6)		外面凹線文6条、内面ナデ	砂粒少ない
図 22	88	SD9	弥生土器	壷 口縁部	(11.8)	(4.9)		内外面ナデ	砂粒多い
図 22	89	SD9	弥生土器	甕 口縁部		(3.3)		く字状口縁、端部拡張、内外面ナデ	緻密
図 22	90	SD9	弥生土器	高坏 口縁部	(13.4)	(1.7)		口縁端部凹線1条、口縁部凹線2条、内外面ナデ	砂粒やや少ない
図 22	91	SD9	弥生土器	高坏 口縁部	(19.7)	(5.6)		外面ハケ、内面ハケ後ミガキ	砂粒非常に少ない
図 22	92	SD9	弥生土器	高坏 脚部		(2.5)	(17.6)	内面端部に粘土帯貼付け、内外面ナデ	砂粒やや多い
図 22	93	SD9・10	弥生土器	底部		(3.6)	(7.1)	平底、外面ハケ、ナデ、指頭圧痕、内面ナデ	砂粒やや多い
図 22	94	SD9・10	弥生土器	底部		(3.0)	(7.0)	平底、内外面ナデ	砂粒やや多い
図 22	95	SD9	弥生土器	底部		(5.4)	(8.0)	平底、外面ハケ、内面ナデ	砂粒やや多い
図 23	100	SD10	弥生土器	壷 口縁部	(16.2)	(7.6)		貼付口縁、端部面取り、内外面ナデ	砂粒やや多い
図 23	101	SD10	弥生土器	壷 胴部		(8.9)		肩部に微隆起帯、S字状文様、外面ナデ、内面ナデ、指頭圧痕	砂粒やや少ない
図 23	102	SD10	弥生土器	壷 胴部		(4.4)		肩部に櫛描沈線施文後、浮文貼付け、内外面ナデ	砂粒やや少ない
図 23	103	SD10	弥生土器	壷 口縁部	(22.6)	(2.3)		口縁端部凹線文2条、頸部で強く屈曲、内外面ナデ	砂粒少ない
図 23	104	SD10	弥生土器	壷 口縁部	(21.4)	(3.2)		口縁端部凹線文2条、内面斜格子文、内外面ナデ	砂粒やや多い
図 23	105	SD10	弥生土器	壷 口縁部	(19.0)	(3.2)		貼付口縁、端部面取り、外面ナデ、指頭圧痕、内面ナデ	砂粒多い
図 23	106	SD10	弥生土器	壷 口縁部	(22.1)	(3.0)		貼付口縁、端部面取り、外面ナデ、指頭圧痕、内面ナデ	砂粒少ない
図 23	107	SD10	弥生土器	甕 口縁部	(15.1)	(12.0)		外面ナデ、ハケ、内面ナデ、ハケ、ケズリ	砂粒少ない
図 23	108	SD10	弥生土器	底部		(6.7)	(5.0)	平底、外面ハケ、ナデ、内面ナデ、指頭圧痕	砂粒やや少ない
図 23	109	SD10 上層	弥生土器	底部		(3.9)	(5.0)	平底、外面タタキ、内面ハケ、ナデ	砂粒やや少ない
図 23	110	SD10	弥生土器	器台		(14.2)		円形透かし3方向、外面ミガキ、内面絞り痕、ハケ	砂粒少ない
図 23	111	SD10	弥生土器	高坏 脚部		(7.8)		円形透かし、外面ミガキ、内面絞り痕、ナデ	砂粒非常に少ない
図 23	112	SD10	弥生土器	高坏 脚部		(5.7)		沈線4条、坏部から粘土塊充填、外面ナデ、ミガキ、内面ナデ	砂粒少ない
図 29	114	P8	土師質土器	坏	12.6	4.4	8.2	内外面回転ナデ、底面回転糸切	緻密
図 29	115	P8	土師質土器	坏	(12.2)	5.3	(7.2)	内外面回転ナデ	緻密
図 29	116	P22	弥生土器	甕 口縁部	(18.8)	(4.4)		外面ハケ、ナデ、内面ナデ	砂粒やや少ない

図面番号	遺物番号	遺構名等	種別	器種 部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	特徴・調整	胎土
図 29	117	P54	弥生土器	壷 胴部		(7.3)		斜格子文粘土帯貼付、外面頸部ハケ、体部ミガキ、内面ナデ	砂粒少ない
図 29	118	P73	弥生土器	底部		(5.0)	(6.6)	高台状、内外面、底面ナデ	砂粒やや少ない
図 29	119	P77	弥生土器	壷	(17.4)	(8.7)		櫛描文、外面頸部ナデ、体部ハケ、内面頸部ハケ、体部ナデ	砂粒少ない
図 29	120	P95	弥生土器	底部		(7.4)	7.2	平底、内外面ナデ、底面板状工具によるナデ	砂粒少ない
図 29	121	P123	弥生土器	底部		(4.4)	(7.0)	平底、内外面、底面ナデ	砂粒やや多い
図 29	122	P129	弥生土器	壷 口縁部	(15.8)	(2.7)		貼付口縁、口唇部刻み、沈線 4 条	砂粒やや多い
図 29	123	P150	弥生土器	小型土器 脚部		(4.0)	(6.2)	内外面ナデ	砂粒やや少ない
図 29	124	P181	弥生土器	壷 口縁部	(16.8)	(4.0)		口唇部面取り、内外面ハケ	砂粒やや少ない
図 29	128	包含層	弥生土器	甕 口縁部	(13.6)	(3.7)		口唇部刻み、突帯 1 条、内外面ナデ	砂粒やや少ない
図 29	129	包含層	弥生土器	底部		(2.0)	7.6	平底、内外面、底面ナデ	砂粒少ない
図 29	130	包含層	土師質土器	坏	(10.3)	2.8	4.0	内外面回転ナデ、底面回転糸切	緻密
図 29	131	遺構検出面	弥生土器	甕 口縁部	(20.4)	(4.3)		外面タタキ、内面ナデ	砂粒少ない
図 29	132	遺構検出面	弥生土器	甕 口縁部	(12.3)	(2.7)		貼付口縁、口唇部面取り、外面ナデ、指頭圧痕、内面ナデ	砂粒やや多い
図 29	133	遺構検出面	弥生土器	甕 口縁部	(20.2)	(3.6)		貼付口縁、内外面ナデ	砂粒やや少ない
図 29	134	遺構検出面	弥生土器	壷 口縁部	(8.8)	(5.0)		口唇部円形浮文貼付、内外面ナデ	白色砂粒非常に多い
図 29	135	遺構検出面	弥生土器	脚部		(3.5)	(8.8)	端部面取り、鋸歯文、内外面ナデ	砂粒少ない
図 29	136	サブトレンチ	弥生土器	底部		(1.7)	(4.4)	讃岐系搬入土器	角閃石を含む
図 29	137	遺構検出面	青花	碗 口縁部	(8.0)	(1.7)			緻密

表 2 出土石器観察表

図面番号	遺物番号	遺構名	器種	全長(cm)	全幅(cm)	重さ(g)	特徴	材質
図 8	7	ST1	スクレイパー	10.2	6.6	(60.0)	2 点接合、両面調整、刃部摩耗	サヌカイト
図 8	8	ST1	軽石	5.2	3.9	7.0	一部欠損、加工痕跡なし	軽石
図 9	9	ST2P141	スクレイパー	6.2	3.7	34.0	上部自然面あり、刃部摩耗	サヌカイト
図 9	12	ST3	磨製石斧	8.7	2.6	27.0	左側面に面あり、下部破損	泥質片岩
図 17	43	SK10	軽石	6.4	4.9	15.0	加工痕跡なし	軽石
図 17	51	SK21	打製石包丁	(6.9)	(7.0)	(106.0)	円礫打欠、刃部調整あり	砂岩
図 17	52	SK21	打製石包丁	(5.9)	(4.7)	(43.0)	円礫打欠、刃部調整なし、刃部摩耗	砂岩
図 22	96	SD9	磨製石斧	(4.2)	(4.1)	(20.0)	片刃、刃部のみ	泥質片岩
図 22	97	SD9	打製石包丁	8.4	5.0	69.0	円礫打欠、刃部調整なし、両側縁にわずかに抉りあり	砂岩
図 22	98	SD9	打製石包丁	8.0	7.8	108.0	円礫打欠、刃部調整痕若干あり、両側縁にわずかに抉りあり	砂岩
図 23	99	SD9	磨製石包丁	(10.9)	4.4	(53.0)	片刃、2 ヵ所穿孔、紐孔部、欠損部に摩耗	砂岩
図 23	113	SD10	磨製石包丁	(2.7)	(3.9)	(6.0)	紐孔部のみ、2 ヵ所穿孔	泥質片岩
図 29	125	P7	磨製石斧	(4.0)	(3.8)	(27.0)	片刃	蛇紋岩
図 29	126	P51	敲石	12.4	6.3	386.0	両端にツブレ	砂岩
図 29	127	P89	石器素材	28.5	14.5	5,400.0	楕円形礫、両極剥離により両端に剥離、ツブレ	砂岩

第Ⅳ章　総括

今回の調査では、竪穴建物跡７棟(竪穴状遺構３棟含む)、掘立柱建物跡３棟、土坑29基、溝状遺構14条、ピット列等が検出された。遺跡の北側で行われた高知南国道路建設に伴う発掘調査の成果(以下、北側調査区という)と合わせて、以下に簡単ではあるが時期ごとの傾向についてまとめる。

１．弥生時代

弥生時代の遺構は大きく分けてⅠ期：前期末～中期初頭、Ⅱ期：中期前葉～後期初頭、Ⅲ期：終末期～古墳初頭の３時期に分けることができる。

集落の立地は、北側調査区では丘陵北麓に総延長1kmにもおよぶ何条もの灌漑用水路があり、東側の下田川に近い自然堤防上に居住域が広がっていた。今回の調査でも、丘陵に近い１区でSD9～11などの溝状遺構があり、下田川に近い２区に竪穴建物跡が立地する。特に２区東部は河床礫層が露出しており、周辺より若干高い地形であったことが分かる。そのために削平も大きく、遺構の残存状態が悪いため、遺物量も少ない。

時期変遷について概観すると、Ⅰ期の集落の初現となる遺構は、SK14・18・21・22などの土坑である。長楕円形や溝状の平面形で、SK22などは土器の一括廃棄が行われている。この時期の竪穴建物等の遺構は見つかっていないが、西野々遺跡の集落の形成過程を示す資料といえる。

Ⅱ期には、SD9～11の溝状遺構やSK30・34などの土坑がある。北側調査区では60棟以上の竪穴建物跡が検出され、最も集落が隆盛した時期である。丘陵北麓には多数の灌漑用水路が掘られ、周辺にも大規模な土木事業がおよぶ。しかし、今回の調査では遺構・遺物の急激な増加はみられない。

Ⅲ期には、ST4をはじめとする竪穴建物跡がある。北側調査区では、Ⅲ期の竪穴建物跡は４棟が確認されているのみである。今回の調査と次回報告する４・５区の成果も含めると、Ⅲ期の集落が現在の香長中学校敷地内を中心に広がることが考えられる。

これらのことから、集落が時期によって移動していることがいえる。Ⅱ期の竪穴建物は、北側調査区東側を中心に営まれ、後期初頭で一度姿を消す。それから空白期間を置いて、Ⅲ期には南側に中心を移す。田村遺跡群が最盛期を迎える頃に衛星集落として多数の竪穴建物が建てられていた西野々遺跡だが、空白期間をおいて、田村遺跡群でほとんど遺構が見られない弥生終末期に再び集落形成される時には、立地を変えており、集落の再編等の大きな変化を示しているのであろう。

また、竪穴建物跡のうち、規模が推定できるものの面積を比較してみると、復元値ではあるがST1が15.90㎡、ST2が16.18㎡、ST3が15.06㎡、ST4が32.15㎡とST4だけが突出して大きいことが分かる。ST4は床面から図10-13や図11-18のようなほぼ完形に復元できる土器や、集石状にまとまった円礫を検出していることから、建物廃絶祭祀が行われたことも考えられる。また、付属遺構としても地山削り出しのベッド状遺構を有するという特異性が見られ、周辺建物とは大きな差異が感じられる。ST4以外は時期がはっきり確定できないため時期差の可能性もあるが、同

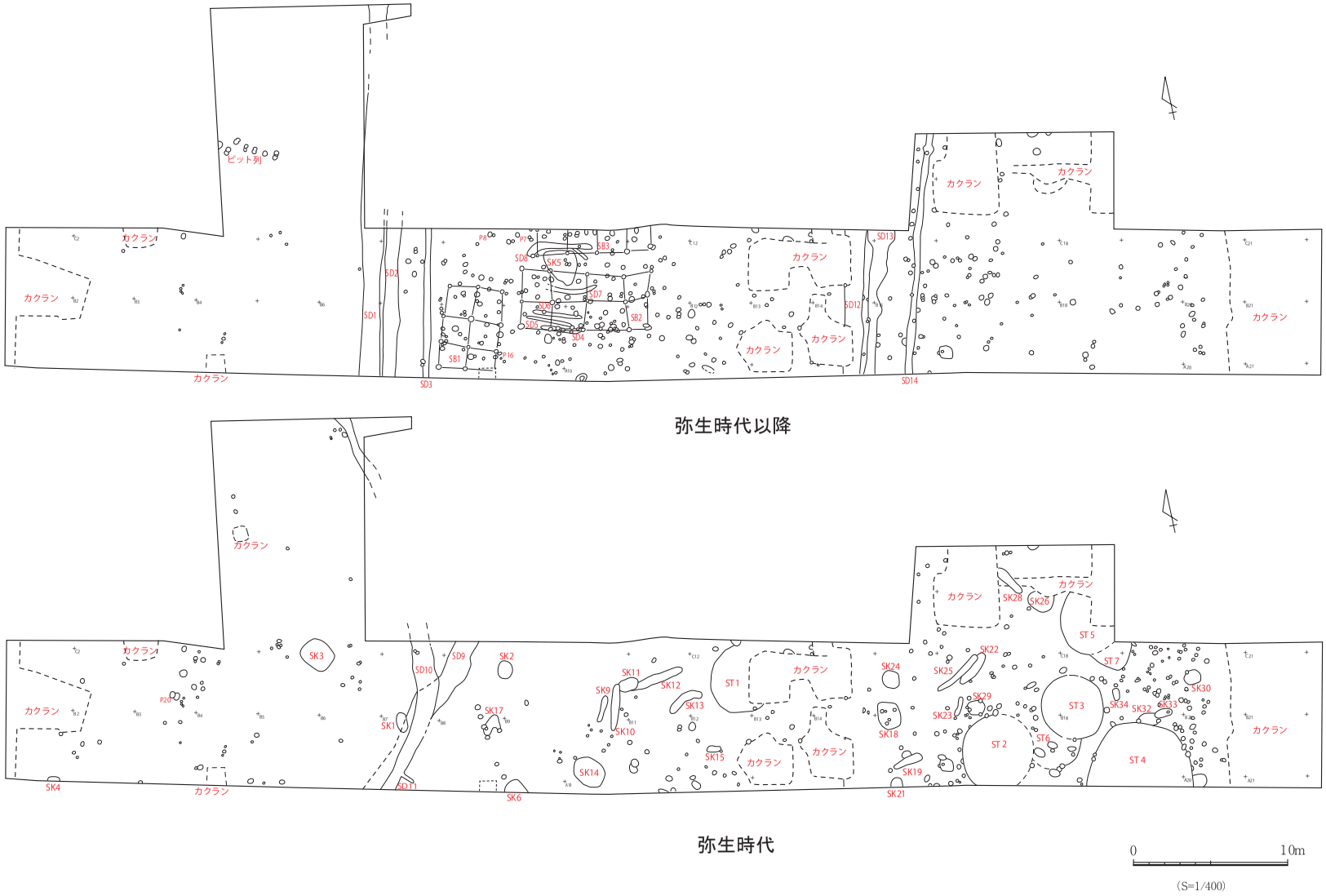


図 30　時期別遺構配置図

時期であるとすれば、この差が建物の性格によるものなのか、階層によるものなのかは集落構造を考えるうえで今後検討すべき課題である。

2．古代・中世

SD1 ～ 3 と SD12 ～ 14 の 2 ヶ所で 3 本が並行する溝状遺構が検出された。SD12 ～ 14 は真っ直ぐ延長すると、北側調査区Ⅵ区 SR-6001 および SR-6002 につながる可能性がある。SR-6001・6002 はそれぞれ両側に側溝を持つ幅約 2.1 ～ 3.0 m の古代の道路状遺構で、並行して重なり合って検出されている。SR-6001 は深さ 18cm 以下の浅い側溝を伴い、SR-6002 は深さ 85cm以下の深い側溝を伴っている。今回の調査では SD13・14 が浅く、SR-6001 に対応する可能性があるが、SD12 は深いにもかかわらず、対応する溝が検出されていない。SD13 から SD12 に道が広げられたという解釈もできるが、時期も全く不明なため、延長ととらえられるかは検討の余地がある。

また、SD1 ～ 3 を真っ直ぐ延長すると、北側調査区Ⅰ区とⅥ区の間にあたるが、その周辺では道路状遺構は確認されていない。

掘立柱建物跡 SB1 ～ 3 の軸方向も溝状遺構と並行もしくは直角の配置をしており、関連性が見てとれる。SB1 ～ 3 は、2 間 × 3 間もしくは 4 間の総柱建物で、ピット平面形は径 18 ～ 38cmの円形である。遺物が伴わなかったために時期は不明だが、柱穴径も小さく、中世に属する可能性が高い。

3．まとめ

図 30 に、遺構埋土の違いで判別した時期別遺構配置図を掲載している。大きく分けて埋土が暗褐色の弥生時代と暗灰褐色の弥生時代以降に分けているが、判別のつかないものに関しては両方の配置図に載せている。出土遺物のない遺構も多いため、細かい部分では不正確な点も含むが、遺跡内の土地利用の仕方に大まかな傾向をみることができる。弥生時代には SD9 を境に東側へいくほど遺構が集中する傾向がある。調査区中央部を中心に土坑が分布し、東側を中心に竪穴建物跡が分布する。弥生時代以降には、SD1 と SD14 に挟まれた中央部で遺構が集中する。建物として認識できないが、東側にもピットが分布する。

参考文献

廣田佳久・小野由香『西野々遺跡Ⅰ』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター　2008 年
廣田佳久『西野々遺跡Ⅱ』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター　2011 年
廣田佳久『西野々遺跡Ⅲ』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター　2011 年
出原恵三『南国土佐から問う弥生時代像　田村遺跡』新泉社　2009 年

写 真 図 版

調査前全景（南東から）

調査前全景（西から）

図版２

１区・２区遺構検出状況（南東から）

１区西遺構検出状況（北から）

１区東遺構検出状況（北から）

２区遺構検出状況（北西から）

図版４

１区遺構完掘状況（北東から）

２区遺構完掘状況（北西から）

２区遺構完掘状況（南から）

２区遺構完掘状況（南西から）

３区遺構完掘状況（北から）

３区土層堆積状況（東から）

ST1 完掘状況（南から）

図版６

ST1 石器出土状況（北から）

ST2 遺構検出状況（南から）

ST2 床面検出状況（南から）

ST2・3・6 検出状況（南から）

ST2 完掘状況（北から）

ST3 完掘状況（東から）

ST3 土層堆積状況（西から）

ST3 東サブトレンチ（北から）

ST3 床面検出状況（南から）

ST2・3・6 完掘状況（北から）

図版８

ST4 完掘状況（南から）

ST4 土層堆積状況（東から）

ST4 中央ピット土層堆積状況（西から）

ST4 床面検出状況（東から）

ST4 中央部土器出土状況（北から）

ST4 P4 上土器出土状況（北から）

ST4 P4 上土器出土状況（北から）

ST5・7 土層堆積状況（西から）

ST5・7 土層堆積状況（南から）

ST5・7 完掘状況（南から）

図版 10

SK2 土層堆積状況（南から）

SK2 完掘状況（南から）

SK3 土層堆積状況（東から）

SK3 完掘状況（南西から）

SK4 完掘状況（北から）

SK5 土層堆積状況（東から）

SK9 土層堆積状況（南から）

SK10 土層堆積状況（北から）

SK10 土器出土状況（北から）

SK9・10 完掘状況（東から）

SK11 土層堆積状況（南から）

SK11 完掘状況（西から）

SK12 土層堆積状況（東から）

SK12 完掘状況（北から）

SK13 土層堆積状況（東から）

SK13 完掘状況（北から）

図版 12

SK14 完掘状況（北から）

SK15 完掘状況（北から）

SK17 土層堆積状況（南から）

SK17 完掘状況（南から）

SK18・SD13 土層堆積状況（北から）

SK18 完掘状況（北から）

SK19 土層堆積状況（東から）

SK19 完掘状況（北から）

SK20 土層堆積状況（東から）

SK21 土層堆積状況（北から）

SK21 完掘状況（北から）

SK22・25 土層堆積状況（南から）

SK22 土器出土状況（西から）

SK22 完掘状況（南から）

SK26 土層堆積状況（南から）

SK26 完掘状況（北から）

図版 14

SK28 土層堆積状況（東から）

SK28 完掘状況（南から）

SK33 土層堆積状況（東から）

SK34 土器出土状況（西から）

SD1 土層堆積状況（南から）

1 区南壁 SD1 土層堆積状況（北から）

1 区南壁 SD2 土層堆積状況（北から）

1 区南壁 SD3 土層堆積状況（北から）

SD9・10 土層堆積状況（南から）

SD10 土層堆積状況（南から）

SD9・10 遺物出土状況（南から）

SD9 石包丁出土状況（東から）

SD9・10 完掘状況（南から）

図版 16

SD1 ～ 3 完掘状況（南から）

SD12 ～ 14 完掘状況（南から）

SB1 ～ 3 完掘状況（北から）

ピット列完掘状況（南から）

P8 土器出土状況（南から）

P22 土器出土状況

P89 石器出土状況（南から）

P95 土器出土状況（南から）

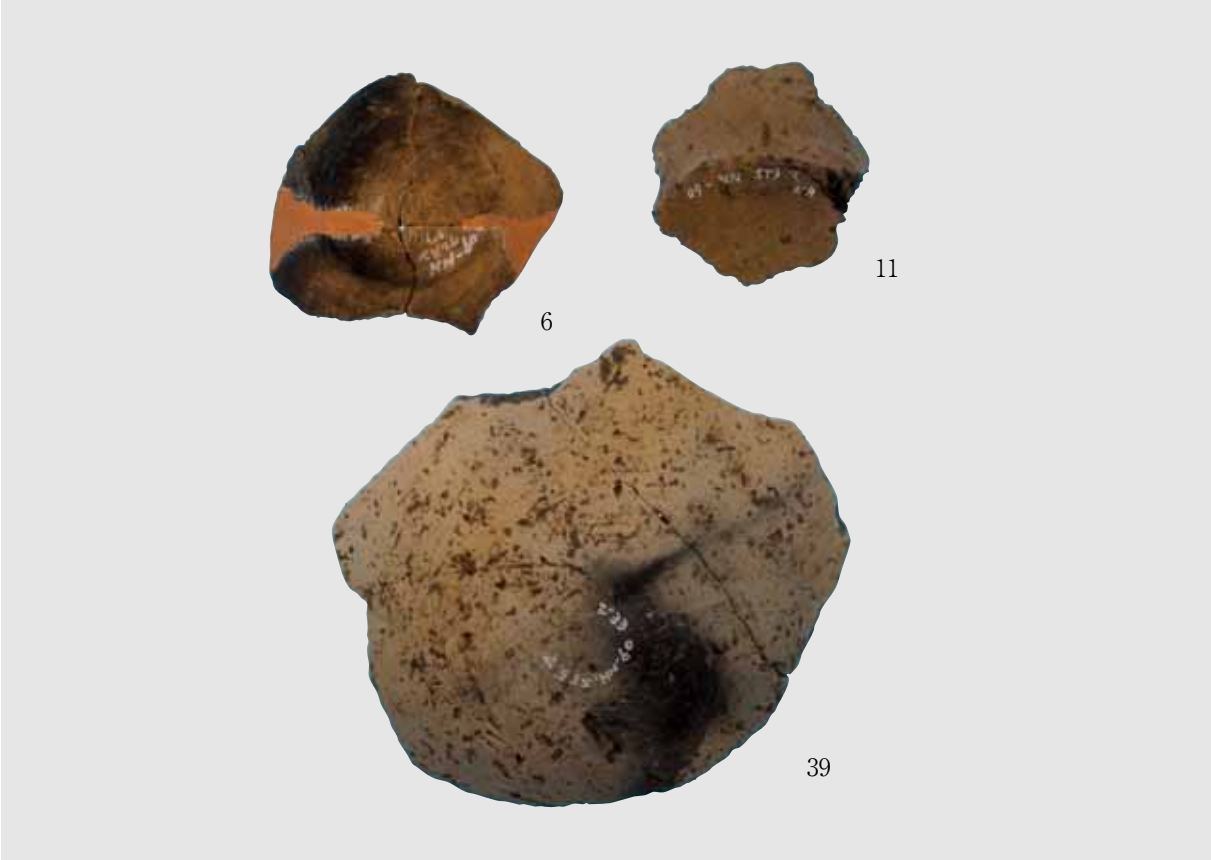
P123 土器出土状況（東から）

1 区西下層確認状況（東から）

出土遺物 1

出土遺物 2

出土遺物 3

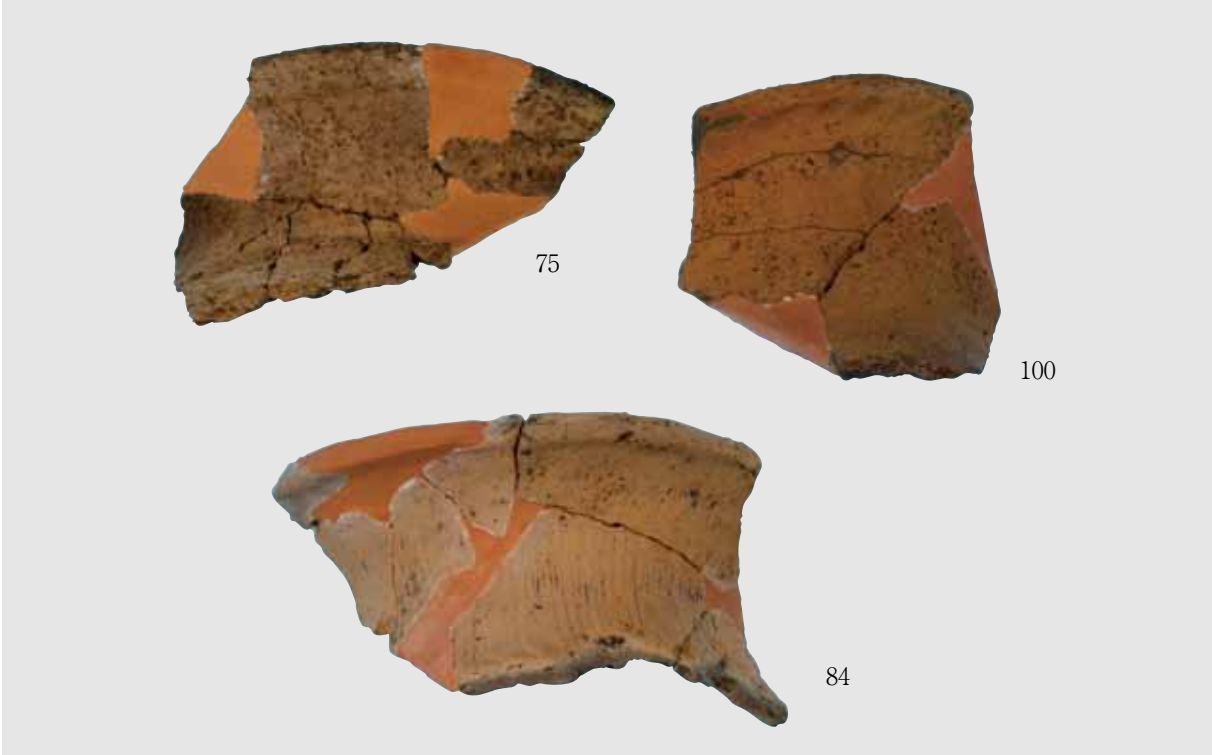


出土遺物 4

出土遺物 5

出土遺物 6

出土遺物 7

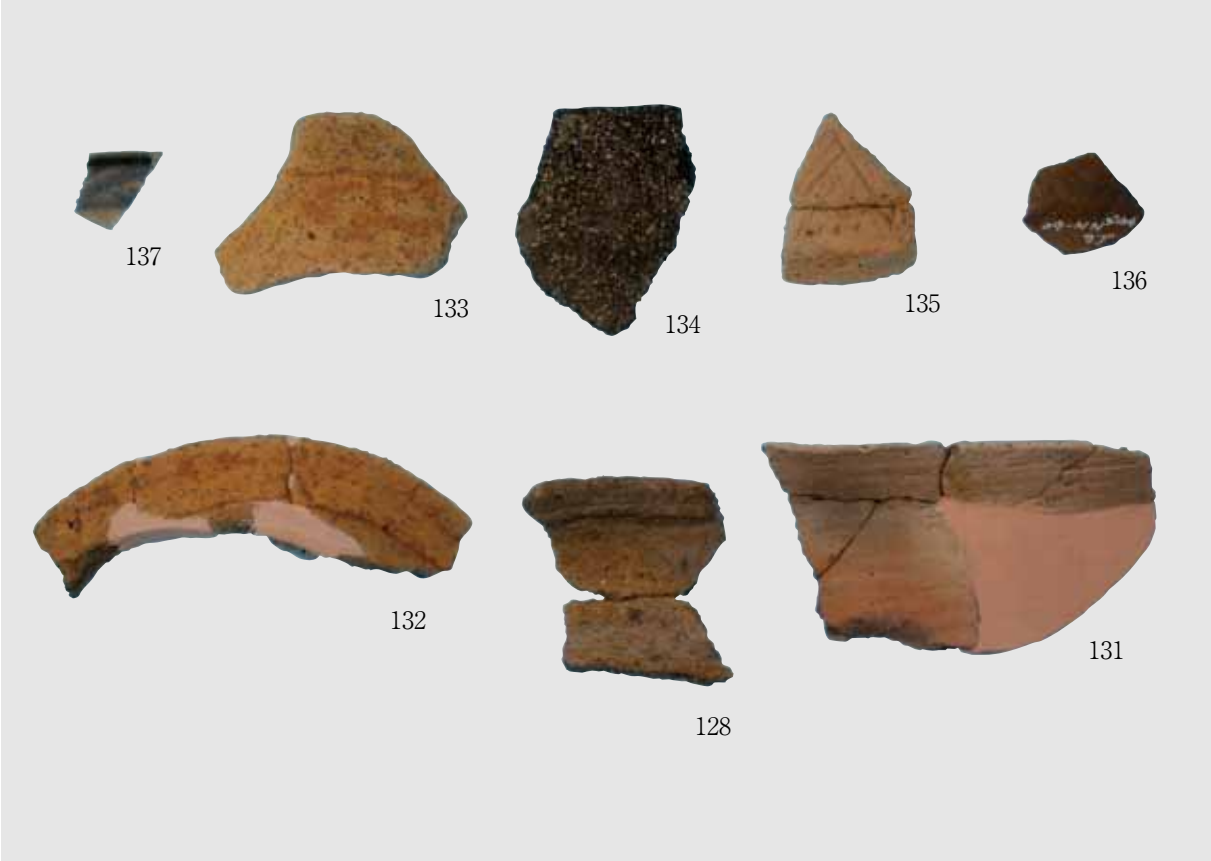


出土遺物 8

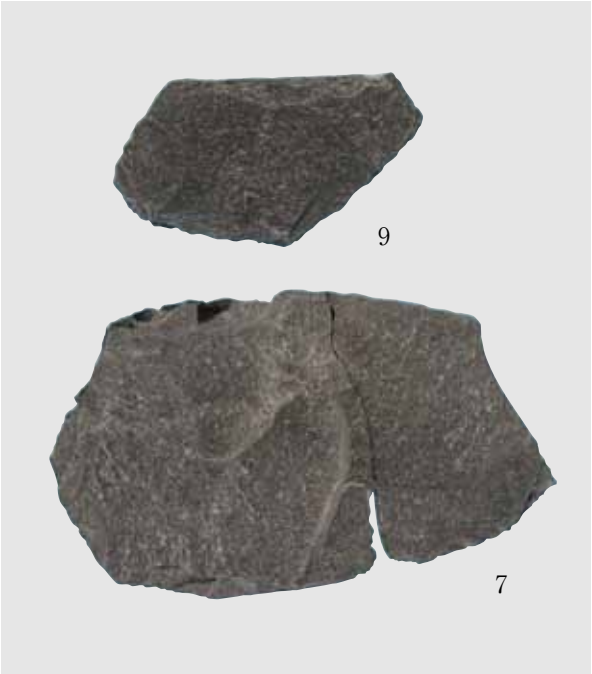
出土遺物 9

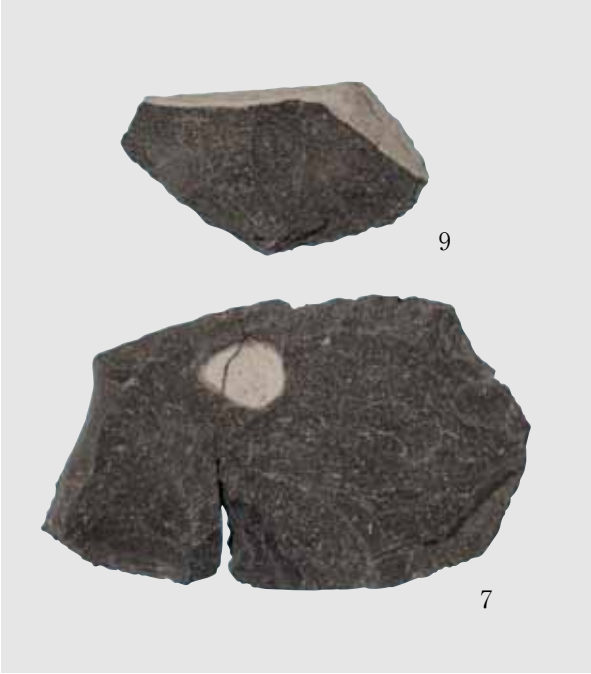
出土遺物 10

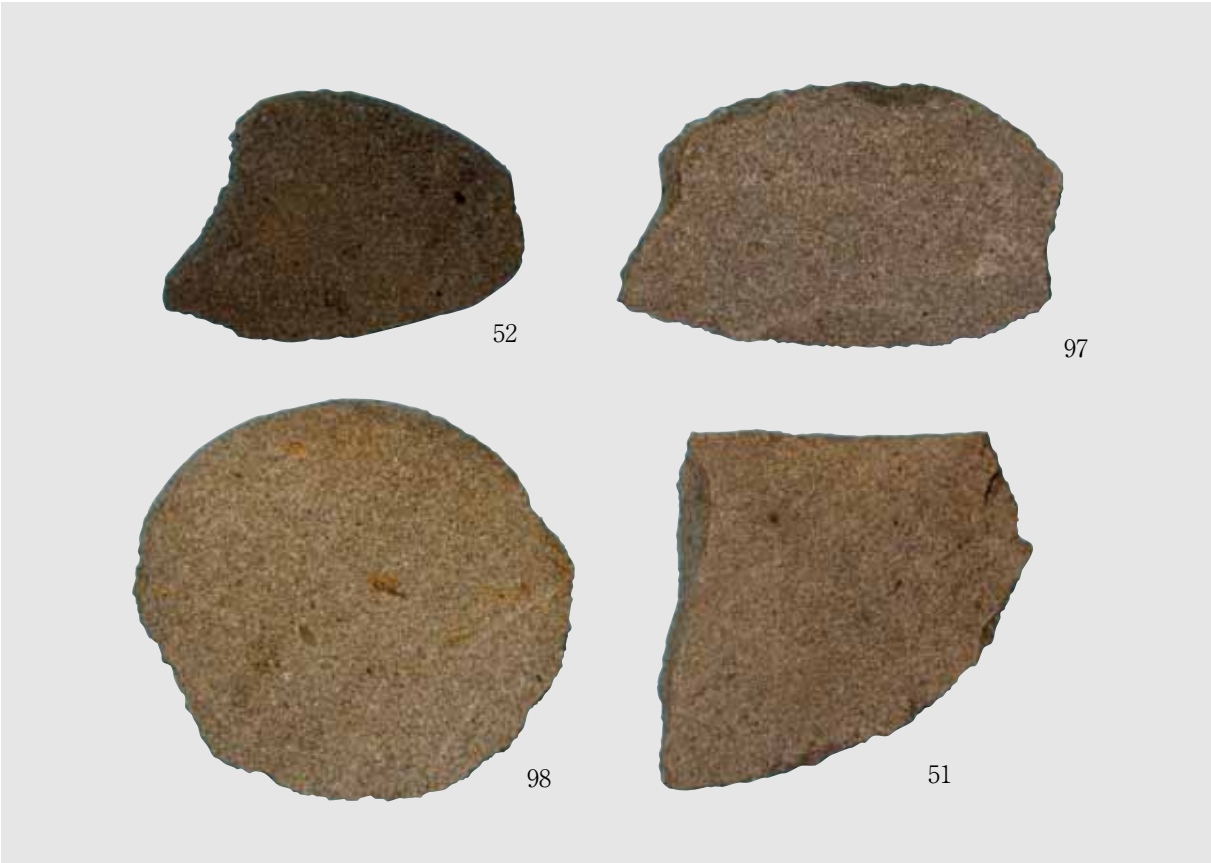
出土遺物 11



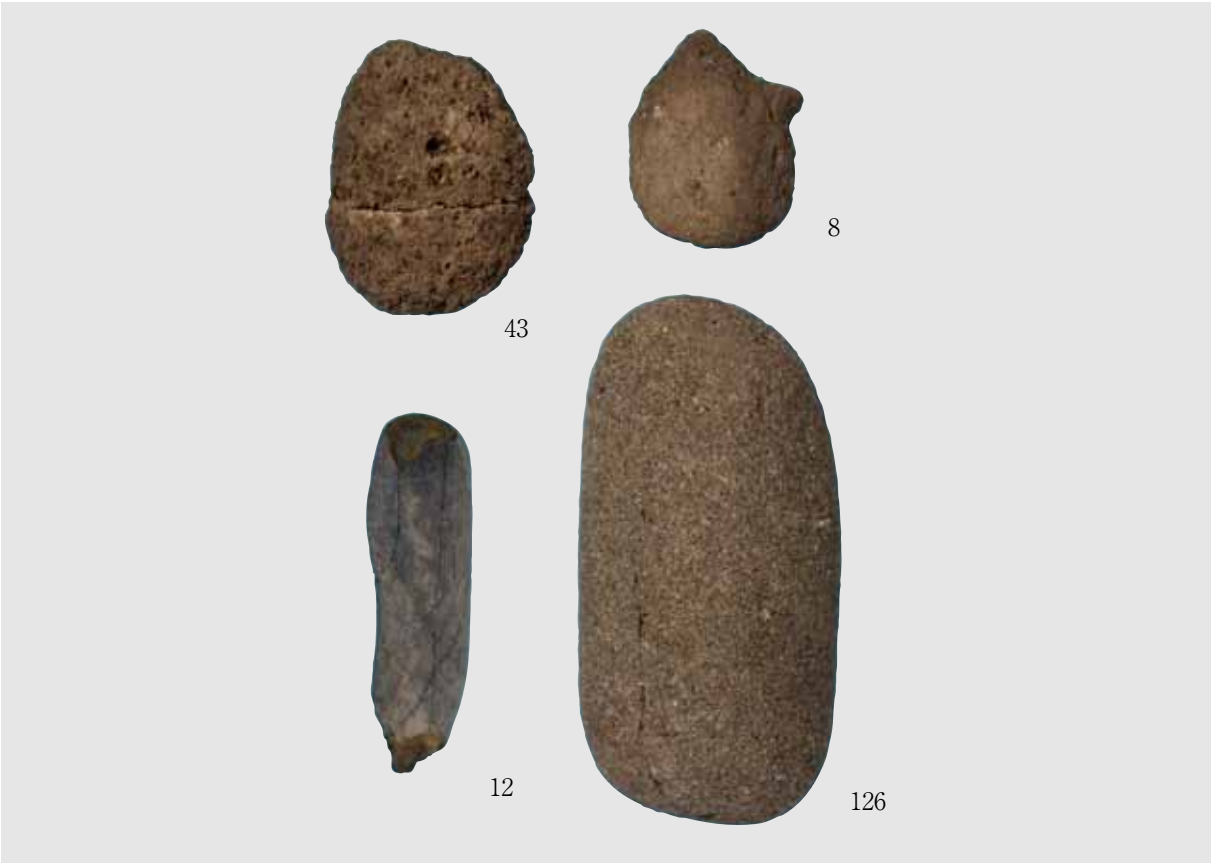
出土遺物 12







出土遺物 13



出土遺物 14

報告書抄録

ふりがな	にしののいせき
書名	西野々遺跡
副書名	香長中学校校舎等建築に伴う発掘調査報告書１
シリーズ名	南国市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 26 集
編著者名	坂本　裕一・油利　崇
編集機関	南国市教育委員会
所在地	〒 783-8501　高知県南国市大埇甲 2301　TEL 088-880-6569
発行年月日	2014 年 3 月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
西野々 遺跡	高知県 南国市大埇 字西野々	39204	040283	33° 33′ 19″	133° 38′ 45″	2010.1.12 ～ 2010.3.12	1,050 ㎡	香長中学校校舎改築に伴う緊急調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西野々 遺跡	集落跡	弥生 古代 中世	竪穴建物跡 土坑 溝状遺構 掘立柱建物跡	弥生土器 石器 土師質土器	

要約	西野々遺跡は弥生時代～近世に至る複合遺跡で、特に弥生時代の集落、古代の官衙関連施設、中世の屋敷地などが確認されている。今回の調査では、弥生前期末～中期初頭の廃棄土坑や、弥生終末期の竪穴建物跡、古代～中世の道路状遺構の可能性がある溝状遺構等を確認した。

西野々遺跡

－香長中学校校舎等建築に伴う発掘調査報告書１－

（南国市埋蔵文化財調査報告書　第 26 集）

2014 年 3 月 31 日発行

発行　高知県南国市教育委員会
高知県南国市大埇甲 2301
電話（088）880-6569

印刷　川北印刷株式会社